

TOYBOOK COLLECTION SERIES

GUNDAM OPERATION

— A·B·O·A·Q·U —

トイブックコレクションシリーズ ガンダムオペレーション ア・バオア・クー

ア・バオア・クー レポート

VOLUME

0005

— 兵士編 —

15 TOYBOOK

ア・バオア・クー戦を支えた兵士達

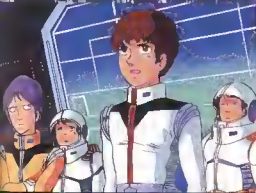
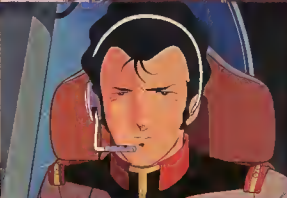
Soldiers in A BAOA QU

これまで、モビルスーツという“兵器”を中心に、ア・バオア・クー戦を振り返ってきたが、今回は“兵士”にスポットライトを当ててみたいと思う。

兵士という視点からア・バオア・クー戦を見てみると、また違ったものが見えてくる。この戦闘を支えたのは、ホワイトベース隊のような歴戦を勝ち抜いてきた兵士達であり、一方で、人員不足から狩り出された学徒兵達であった。さまざまな境遇の兵士が戦いを繰り広げる……。それ故にさまざまなドラマがこの戦闘で生まれ、ア・バオア・クー戦をさらに魅力あるものになっているのである。

幸い、一年戦争の兵士についての記録は多く残されている。それは、アムロ・レイ、シャア・アズナブル、ギレン・ザビなど、後世に伝えられるような魅力的な人物が多かったこと、また“ニュータイプ”という概念が生まれ、戦争において“兵士”もある種“兵器”なみの役割を果たしたことが理由と言えよう。

この巻では、この残された多くの記録をもとに、両軍の兵士の特徴をあらゆる面から考察し、ア・バオア・クー戦における兵士を検証してみよう。



GUDAM OPERATION
VOL.005



一般兵軍服
Military uniforms

地球連邦軍服のスタンダード

主に尉官以下の地球連邦軍人が着用した軍服で、男性用と女性用がある。大型のベルトと、動き易さを重視したスパッツ状のパンツが特徴となっている。基本的には灰色で彩色されているが、例外的に青やピンクのタイプも存在している。これらはホワイトベース隊（以下「WB」隊）の若年兵に支給されたことが確認されており、青は男子用、ピンクは女子用であった（「WB」隊以外の兵に支給された例もあるという）。地域や任務によっては、上着がジャケット・タイプであったり、スパッツがズボン・タイプになっている軍服も支給されていた。



士官軍服
Military uniforms for officers

上級軍人用の高級軍服

佐官以上の階級の地球連邦軍人が着用した軍服。一般用軍服が、数多いバリエーションを持つのは反対に、高級軍人用軍服はこれといった派生型が存在しない（佐官以上の軍人の絶対数が少ないのだから当然ではある）。上着はベルトで締め付けない、ゆったりとしたデザインであるうえ、ズボンも充分な余裕があるストリートなものとなっており、旧世紀の高級軍人用軍服の系譜に属するタイプであることが理解できる。グリプス期のエウゴの高級軍人は、権威的に見えるこのタイプを纏ってか、一般軍人用を着用していた。

Military uniforms and normal suits

軍服、ノーマルスーツ

地球連邦軍

今日我々が知る地球連邦軍の軍服が、いつ頃制定されたものかは定かではないが、一年戦争開戦時には、以降数十年に渡り使用され続けるタイプの軍服は決定されている。地球連邦軍の軍服は、主に兵〜尉官クラスの人物が着用したタイプと、佐官〜将官クラスの高級軍人が着たタイプのモノの2種に大別される。この2種の軍服は、時期や配属地域によって、デザインに微妙な差があるようだが、基本的には同じと考えていい。デザイン的には旧世紀期頃の軍服と大きくは変わっておらず（一般兵用は、簡素で動きやすいものになっている）、色合いも地味＝灰

色である。少数の例外はあるが、陸戦隊員の軍服すらも灰色のものを着用しており、地球連邦軍＝灰色というイメージに繋がっている。

ノーマルスーツも少なくとも一年戦争開戦時には制定されているが、一年戦争時のデザインは、U.C.0080年代中期には、新規のデザインへ変更された。それらには整備兵用の特殊なタイプも存在するが、軍服同様にパイロット用と、それ以外の兵種用の重装仕様との2タイプに大別される。



ノーマルスーツ
Nomal suits

パイロット用の軽装気密服

地球連邦軍のパイロット用に開発された気密式ノーマル・スーツで、背部に個人用推進機ランド・ムーバーが装着可能である。元はMSパイロット用ではなかったようだが、MS配備後はMSパイロットにも支給された。色にいくつかのバリエーションがあり、黄色、青、そして少数ながら白のタイプも存在している(色の差異による仕様の違いは不明)。このタイプのノーマル・スーツは、U.C.0080年代前半まで使われたが、グリプス期にはバック・パックが標準装備された新型に一新されている。



重装宇宙服
Space suits

最も普及した通常仕様の気密服

パイロット以外の兵種の軍人が着用した重装宇宙服で、地球連邦軍用気密服のスタンダードとなっていた(U.C.0075年に正式採用との説あり)。バック・パックが標準装備されているため、活動限界時間は比較的に長いと思われるが、自由度は高くなく、最低限度の機能を持つ宇宙服だともいえる。それでも、パイロット以外の軍人はこれ以外の選択肢はなく、行動が束縛されがちな重装宇宙服で任務(時には白兵戦も)を行なわざるを得なかった。一年戦争終戦後、数年間使用されたようだが、順次新型に交換されていった。





一般兵軍服
Military uniforms

大時代的な軍服

近代的な地球連邦軍の軍服に対し、ジオン公国軍の軍服は大時代的なロシア風のデザインで統一されている。一目で階級が分かってしまうマント、特定の階級以上の者に与えられる個人仕様のヘルメットなど、近代的合理性とはほど遠いスタイルであるが、所謂「勇ましい」デザインであることも否めない。常に死と隣り合わせの軍人は、自らを「勇ましい」と思えなければ戦えない部分があるため、軍服も相応のデザインの優越性が求められる。その特化した例が、ジオン公国軍の軍服であろう。



高官軍服
Military uniforms for officers

鮮烈な印象の高級軍人用軍服

主に将官級の人物に与えられる軍服で、尉官・佐官のようなマントは着けない。生地は黒系と濃緑色のものが確認されている。胸の階級証明が強烈な印象を与える他、マントを着けていないため、特殊な仕様の軍服に見えるが、基本的なデザイン・ラインは通常のものとほぼ変わっていない。ジオン公国の総帥(大将兼任)ギレン・ザビは黒のタイプを身に付けて、国民や兵士の前で機度なく演説を行っており、この軍服が公国国民に与えた心理的影響は計り知れない。





高官軍服(キシリア・ザビ)
Military uniforms for KYCILIA ZABI

権力が可能にした個人仕様軍服

ジオン公国は女性兵士が多かったが、基本的には軍服は男性用とさして変化していない(秘書用などの一部にはタイト・スカート仕様もある)。それでも、一定以上の階級や政治的立場の女性は、軍服のカスタマイズを行っていた。その端の一例がキシリア・ザビ少将で、ヘルメットと肩章、ベルトなどを除く多くの部位が、正規の軍服とは掛け離れたデザインとなっている。ここまでのカスタマイズは、ギレン総帥に次ぐ政治的実力者だったキシリア少将だからこそ可能で、特例中の特例と言わざるを得ない。



ノーマル・スーツ
Space suits

広く普及した公国軍の基本モデル

地球連邦軍と異なり、ジオン公国軍では非パイロット要員にも、パイロットと同じこのタイプのノーマル・スーツが支給されることが多かった。また、軍服と同様、ある程度以上の階級のパイロットには、カスタマイズが許可されており、シャア・アズナブル大佐や「黒い三連星」などが、通常(濃緑色)とは異なるカラーリングを施したスーツを着用している。このデザインのノーマル・スーツは、グリプス戦役でのアクシズ軍、第一次ネオ・ジオン戦争でのネオ・ジオン軍も使用している。

Military uniforms and nomal suits

軍服、ノーマルスーツ

ジオン公国軍

ジオン公国では、旧世紀、特にA.D.1800年代末〜1900年代前期頃のヨーロッパ風デザインが見られ、曲線を多用した有機的なラインが各所で採用されていた(上層部の貴族趣味的な側面も、これによる所が大きい)。結果、軍服も時代錯誤とも感じられる古風なデザインとなっている。このような復古的な運動は、スペースノイドに対する偏見とあいまって、地球連邦内でのジオン公国への危険視が高まった一因と考えることもできよう。

ジオン公国軍軍服の特徴のひとつに挙げられるのが、個人の裁量によって、あ

る程度のデザイン変更が許されていたことである(副官以上の階級が必要だったらしい)。実際、高名なシャア・アズナブル大佐に至っては、軍服そのものの色を変更していた。実力さえあれば2階級特進などザラであったこともあって、軍服のデザイン変更は、ジオン軍人(特に兵からの叩き上げの軍人)にとつてのステータス・シンボルでもあったようである。このような配置が、ジオン公国軍全体の士気向上に一位買っていたことは間違いない。



連邦軍ノーマル・スーツ用ヘルメット
Helmet for E.F.S.F.

連邦軍パイロットの装備

地球連邦軍のパイロットに支給された、ノーマル・スーツ用ヘルメット。2重のシーリングによって、気密性は極めて高い。宇宙のみならず、地上軍の航空機部隊（コア・イージー部隊）のパイロットも同じ形状のタイプを使用していたことから考えて、戦域を問わず支給された装備のようである。ジオン公国軍のヘルメットのような派生形は少なく、一部の特務部隊（例：アレックスのテストを行っていたG-4部隊）で形状の異なるタイプが使用された程度だったようである。



M-71
Gun for E.F.S.F.

兵士を守るための拳銃

ブローバック式の極めてオーソドックスな自動拳銃。パイロット用の護身火器として広く支給された拳銃で、ノーマル・スーツの腰にホルスターごと装備される。用拳銃らしく若干大型のフォルムを持つが、所詮拳銃に過ぎないため、自動小銃装備した正規の歩兵と戦うことは難しい。基本的に防衛的な装備であり、それだけでもそれ以下でもない。宇宙世紀においても、拳銃の軍事的な価値は旧世紀とわっていないようである。一年戦争後期には、改良型のM-71-A1も一部に支給されている。

Equipments of soldiers

兵装

地球連邦軍

一年戦争当時、MSやMA、そしてニュータイプ研究の分野でジオン公国に大きく溝を空けられた地球連邦軍だったが、それ以外の技術ではジオン公国軍と同等に走り合っていた。逆を言えば、ジオン公国軍のアドバンテージはその3分野に限ると言っても過言ではない。このため自兵隊などのミニマムな戦闘となれば、物資に勝る地球連邦軍が優勢であった。そこで使用される人間用火器やノーマル・スーツのレベルが同じとなれば、戦いの結果は決まったようなものだった。地球連邦軍の人間用装備は、旧来の兵装の延長線上にある簡素なデザインで、生産性に重点が置かれているようである。一般装備の簡素化は、RGM-79に代表される主力MSの分野でも見られるため、簡素化による生産性の向上は、地球連邦軍の方針であると考えられ、それは徹底されていたようである。

ジオン公国軍

重工業分野以外の装備品においては、ジオン公国軍といえども地球連邦軍と決定的な差はなかったようである。その代わりという訳ではないだろうが、ジオン公国軍の個人装備は、公国特有の復古的なデザインが取り入れられている。一言機面や生産性に疑問符が付く装備がない訳ではないが、MSなどマクロな装備での合理化が進んでいたため、ミニマムな身の回りの物はデザイン重視とすることで、「選ばれた兵」としての自覚を促していたのかもしれない。一般装備に関してはジオン公国と地球連邦軍の差は無に等しいと前述したが、ジオン公国軍には個レベルで実戦的な装備を持つ者もあり、ザビ家の長女キラア・ザビ少将やシャア・アズナブル大佐は、携帯式の試作レーザー銃を装備していたとも言われる。



ジオン公国軍ノーマル・スーツ用ヘルメット
Helmet for
Principality of Zeon force

ノーマル・スーツの個性の反映

軍服は各人の裁量が大きく反映されたが、ノーマル・スーツとなると機能面での問題もあるため、カスタマイズは専らヘルメットに集中していた。代表的な改修は「黒い三連星」やノリス・バックカード大佐の「トゲ」、シャア・アズナブル大佐の「ツノ」、ランバ・ラル大尉やトクワン少尉の「紋様」「パーソナル・マーク」などが知られている。このようなカスタマイズとは異なるが、ニュータイプ専用機対応のララァ・スン少尉やシャリア・ブル大尉が使用した、特殊ヘルメットが存在した。



ナバン62式

Gun for
Principality of Zeon force

行き過ぎた復古主義の象徴

ジオン公国軍の制式拳銃ナバン62式は、「シャクトリムシ式」とも呼ばれるトグル・アクションを採用した珍しい拳銃である。旧世紀にもルガーP08などのトグル・アクション式の銃は存在したが、複雑な機構が壊れてか徐々に姿を消していった。ナバン62式にも同様の問題点があったらしく、堅実なブローバック式の拳銃・ゲルタP8も同時に採用されていた。復古主義も流星に行き過ぎだったようだ。なお、グリプス戦役時には、アクシズの搭取ハマーン・カーンもナバン62式を使用していた。





GIHREN ZABI's speech



ジオン公国軍総帥、ギレン・ザビは兵士の士気を高めるため、ことあるごとに演説をしていた。これはジオン公国軍兵士の気概に合っていたのか、かなりの効果を上げていたようである。ここでは、ア・バオア・クー戦突入直前に、ギレン・ザビが行った演説を当時の記録をもとに掲載したいと思う。ギレン・ザビ、そしてジオン公国軍というものを理解するために有用な資料になるはずである。

ギレン・ザビの演説

我が忠勇なるジオン軍兵士たちよ
今や地球連邦軍艦隊の半数が
我がソーラレイによって宇宙に消えた
この輝きこそ我らジオンの正義の証である

決定的打撃を受けた地球連邦軍に
いかほどの戦力が残っていようと
それはすでに形骸である
あえて言おう
カスであると

それら軟弱の集団が
このア・バオア・クーを抜くことはできないと
私は断言する

人類は
我ら選ばれた優良種たるジオン国国民に
管理・運営されてはじめて
永久に生きのびることができる
これ以上戦い続けては
人類そのものの存亡に関わるのだ

地球連邦の無能なる者共に思い知らせ
明日の未来のために
我がジオン国国民は起たねばならんのである



TOYBOOK COLLECTION SERIES

GUNDAM OPERATION

A・BAOA・QU

ア・バオア・クーレポート

VOLUME

0005

兵士編

一年戦争の兵士達

地球連邦軍の組織構造

一年戦争開戦時における地球連邦軍は、当時の総人口の8%に相当する人員を有していたといわれている。地球圏全体を統治することを目的とした軍隊組織であることを鑑みれば、これは当然の規模であるといえる。その大前提には「文民統制(軍事に対して民主的な統制を加えることで、政治への軍の介入を排除する意思)」があり、地球連邦軍の最高司令官は地球連邦首相であった。地球連邦議会の承認を得た上で首相が連邦安全保障会議に命令することによって、地球連邦軍の出動が認められるというシステムがとられていた。しかしながら、現役の地球連邦軍将官が地球連邦議会の評議員となることを認められていたことなどから、その文民統制の機構は必ずしも機能しているとは言えなかったといえる。

一方、実質的な作戦行動における最高機関が地球連邦軍参謀本部である。ここから各軍管区、ならびに特定の軍(各政府軍など)への命令が発せられることになる。ただし、一年戦争緒戦の大敗北によって、地球連邦軍の指揮系統は十分に機能を果たすことができなくなっていた。ルウム戦役において宇宙軍の総指揮を執ったレビル大將が、本来は地球軍の管轄であるオデッサ作戦の指揮を執るという、特例的な措置も見られたのである。

地球連邦軍兵士、将校の特徴

地球連邦軍は基本的に志願制を採用していた。しかし、一年戦争緒戦において人的資源が不足した折には召集令状による徴兵も行われ、大戦後期に至っては未成年の少年少女までもが兵士として徴用されている。こうした背景には、地球連邦軍の基本的な戦略構想である物量による優位性の確保があるといえよう。それ故に、一般兵の採用基準はきわめて緩やかであり、一般兵の士気の低さを招く要因ともなった。雇用対象として地球連邦軍兵士という道を選んだ大多数の者には、明確な目的意識や職業意識が欠けていたのである。さらに、士官学校や大学等の専門教育を受けることなく一兵卒として入隊した場合、いかなる戦功を上げたとしても大尉(特例的に少佐)までしか昇進できないという制限があった。そうした待遇の悪さも、一般兵のモラルの低下を助長していたといえよう。

専門教育を受けた上で一定の養成期間を経て任官されるのが将校クラスの人材である。彼らはいわゆるエリートであり、最終的には大將まで昇進する資格を許されていた。こうした士官の中には、政界への進出を望む者も少なくはなかった。俗に「連邦軍閥」と称されるこうした風潮が「文民統制」の意義を薄れさせ、後の軍部の暴走と腐敗を招いたとも考えられている。無論、中には真摯な姿勢で職務に臨む兵士や将官も存在していた。地球連邦軍が軍組織たりえたのは、ひとえに彼らの力によるものと評する者さえるのである。



ジオン公国軍の組織構造

ジオン共和国の成立と同時に発足した国防隊から発展したジオン公国軍は、行政機構と密接に関わっている軍組織として知られている。「政軍一体」といわれるこの傾向は、ジオン公国軍がザビ家によって完全に掌握されていたこと、その軍部によって議会が傀儡と化していたことに起因していた。よって、軍事と行政のすべてが総帥であるギレン・ザビ大将によって統制されており、軍事全般を管轄すべき公国軍総司令部は実質的に機能していなかった。さらに、下部組織であるはずの宇宙攻撃軍のドズル・ザビ中将与突撃機動軍のキシリア・ザビ少将の裁がなくしては、総司令部は各方面からの提案について決定を下すことすらできなかったのである。これはジオン公国がザビ家の独裁国家であることを示す顕著な例であるが、一方でこのシステムゆえの利点も存在していた。こうした形式は、宇宙攻撃軍や突撃機動軍の独自判断による行動を可能とし、柔軟な作戦展開を成し得る一因ともなっていた。しかし、宇宙攻撃軍と突撃機動軍という二分構造も、元を辿れば0078年10月のドズル・ザビ少将(当時)とキシリア・ザビ大佐(当時)の戦術方針の対立に端を発する。このように、ジオン公国軍は徹底的にザビ家の統制下に置かれた組織だったのである。

ジオン公国軍兵士、将校の特徴

組織としてのジオン公国軍が限りなくザビ家の私物に近い性格をもっていったことは、前述の通りである。しかし、ギレン・ザビ総帥をはじめとするザビ家の人間が能力主義をもって軍務にあたったことから、危惧されるような軍内部の腐敗はほとんど起こらなかった。この能力主義により、ジオン公国軍は兵士全体が高い士気を維持していた。地球連邦軍では兵卒の昇進がある程度まで制限されていたのに対し、ジオン公国軍では功績によって高い昇進が可能であった。戦功をあげさえすれば、一兵卒の出であっても将軍にまで上り詰めることも夢ではなかったのである。公国軍が一見すると無謀とも思える作戦を成功させていった背景には、こうした兵士たちの士気の高さがあったといえるのである。

ジオン公国軍の能力主義は、総人口の少なさ故の人的資源の不足を補うという側面もあった。ジオン公国軍は徴兵制を採用していたが、一年戦争末期にはその年齢基準を15歳にまで引き下げられている。また、地球連邦軍が戦死者にのみ認めていた特進制度も採用し、一定以上の階級の将兵には特別仕様の装備を認めるなど、兵士の士気を高めることに腐心していた。上官の昇進が部隊員全員の待遇改善につながるような配慮も行われていた。戦争において物量は勝敗を決する最大の要素ではあるが、兵員の士気もまた勝敗を左右する重要な要因のひとつとなる。物量で地球連邦軍に大きく劣るジオン公国軍にとっては、彼らの士気を維持することが戦力の整備や練成に並んで重要な課題であった証といえるだろう。



ジオン公国軍、地球連邦軍、それぞれの思惑

遅すぎたデギン公王の和平交渉

一年戦争最後の戦いとなったア・バオア・クー攻防戦直前、集結しつつあった地球連邦軍艦隊の3分の1を消滅させたソーラ・レイの照射が、ジオン公国軍のクワジン級“グレート・デギン”をも同時に沈めたことは良く知られている事実である。このグレート・デギンが、単独での和平交渉に望んだデギン・ザビ公王を乗せていたことも、現在では多くの人々に知られている。デギン・ザビ公王は一年戦争末期においてさまざまな外交ルートを用いて地球連邦側に接触し、戦局を和議の方向へ持ち込もうとしていた。0079年12月24日のソロモン要塞陥落直後には、デギン公王の密命を受けたダルシア・ハバロ首相が秘密裏に地球連邦政府との和平交渉を行っていたとされている。

一年戦争開戦時には、ジオン公国の実質的な指導権はギレン・ザビ総帥の手に移っており、デギン公王は作戦や政策の最終的な認可を与える権限しか持ち合わせていなかった。しかし、ギレン総帥が公王の承認を得ずに施行した策すра、事後に公王が承認するサインが記されさえすればその正当性が認められたのである(ソーラ・レイの使用にあたって公王の認可を得ずに作戦を進めたことは代表的な例である)。デギン公王に和平交渉の経過を問われたダルシア首相が「私とて傀儡です」と困ったことも、ジオン公国の権力がギレン総帥に集中していたことの表れであろう。デギン公王からすれば、そうしたギレン総帥の行動は独走に見えたはずである。ギレン総帥への権力の一極集中という政治システムは、政策的な独走を抑止する政治装置が存在しないという問題点を抱えていた。ギレン総帥がソーラ・レイの使用に関する承認を求めた際、デギン公王がギレン総帥を「ヒトラーの尻尾」と評したのはあまりに有名な逸話である。それだけデギン公王がギレン総帥の行いに対して苦々しい思いを抱いていたかというエピソードといえる。敗戦の兆しが見え隠れし始めた一年戦争末期において、デギン公王にとってギレン総帥の独走を止める術はごくわずかであった。その手段のひとつが前述した和平交渉であったのである。

ソーラ・レイ照射と演説に隠されたギレン・ザビ総帥の真意

しかし、デギン公王のこの動きはギレン総帥の知るところであった。デギン公王の行動に対して、ギレン総帥は「老いたな、父上。時すでに遅いのだから」と洩らしたといわれている。ギレン総帥にしてみれば和平交渉はすでに時期を逸したものであり、公王の行動は自らの政策の障害となると考えたのである。さらに、彼にとってデギン公王は父である以上に最大の政敵(という表現は正しくないかもしれないが)であった。実質的な権力は失ったとはいえ、形式上はデギン公王がジオン公国の最高権力者であったためである。予定されていたソーラ・レイの照射によって、地球連邦軍の戦力を削ると同時にデギン公王を排除することは、ギレン総帥にとって軍事的、政治的なメリットが大きかったといえる。この後、ア・バオア・クー攻防戦を控えたギレン総帥が「優性人類生存説」に基いた演説を声高に行った背景には、政敵を群た独裁者の自信があったのだからである。



公国の歪みを生み出した公国軍首脳部の対立

「ジオン公国における内憂はゼビ家内部の対立構造にあったという見方が多い。事実、キシリア少将とドズル中將の戦術方針の相違は軍組織の二分化にまで発展し、指揮系統の混乱を引き起こした。また、ギレン総帥とキシリア少将の政治的な対立は戦略にまで影響を与え、戦力投入の時期を逸するという事態を招くこととなった。ただし、前者が戦術論に根ざす対立であることに対して、後者は政治的な確執に起因するものであったことから、その性質はやや異なるものであったといえる。確実なことは、どちらのケースも最終的には戦局を左右する潜在的な失策を招いたということであろう。例を挙げると、ソロモン海戦直前のギレン総帥とドズル中將、キシリア少将のやり取りでは、ドズル中將が私的な理由からキシリア少将の援軍を拒んだという。このとき、ドズル中將はギレン総帥に対しても「偉そうにふんそり返る前に勝つための手だてを……」と不平を洩らしたという記録が残されている。政治的な判断の上に戦略を組み立てるギレン総帥に対する、ドズル中將の不信任を表す発言といえるだろう。また、ア・バオア・クー攻防戦直前の用兵に関しても、ギレン総帥とキシリア少将の確執が見え隠れしている。ギレン総帥は、地球連邦軍の星一号作戦の目標がグラナダである可能性についてほとんど言及していない。もし地球連邦軍がグラナダを攻略した後にア・バオア・クーを攻撃しようとするならば、突撃機動軍の戦力を減じることができる。キシリア少将麾下の突撃機動軍の戦力が低下することはすなわち、彼女の政治力の低下に他ならない。それゆえにギレン総帥はグラナダ防衛という選択枝を捨てたのだとも考えられるのである。

実現できなかったレビル將軍の戦略意図

ジオン公国軍がさまざまな不安因子を抱えつつア・バオア・クー攻防戦を迎えたのに対して、地球連邦軍は確固たる戦略構想の上に成り立った作戦行動を執った。すなわちジオン公国本土への進攻である。星一号作戦の最終目的はそこにあり、作戦が発動された後の地球連邦軍は統制のとれた状態で作戦行動にあたったと見られている。地球連邦軍唯一の戦略家であり、開戦当初から軍組織を支えてきたレビル將軍が作戦の総指揮を執っていたことも、その一因となっていたといえるだろう。星一号作戦の作戦内容にレビル將軍の意向がどれだけ反映されていたかは定かではないが、作戦において彼の存在が大きな比重を占めていたことは間違いないだろう。しかしながら、星一号作戦の完遂を持たずにレビル將軍はソーラ・レイの照射によって戦死し、一年戦争はア・バオア・クー要塞の陥落を以て終結した。レビル將軍が生きていれば、別の結果になっていたかもしれないが、それはあくまで仮定の話である。予断ではあるが、デギン国王が和平交渉のために地球連邦軍艦隊に接触した際、レビル將軍は「辛いのだな、ジオンも……」と語ったといわれている。一年戦争初期にかの有名な「ジオンに兵なし」の演説を行ったレビル將軍にとって、和睦を図ったデギン国王の接触は感慨深いものであったのかもしれない。



ギレン・ザビ GIHREN ZABI



自らの理想に基き公国を牽引したカリスマ

ギレン・ザビの名が歴史に登場するのは、U.C.0058年のジオン共和国樹立に遡る。このとき彼は事冠14歳でこの“革命”に参加したといわれている(自身もこの経歴を誇らしげに語ったとされる)。実際に彼がこの“革命”にどれだけ貢献できたのかは定かでないが、ジオン・ダイクンの後継者を主とする上で、この経歴は重要な事柄であったのだろう。U.C.0069年にデギン・ザビがジオン公国公王に就任して政界から退いたことで、ギレンは抜きん出た政治力を発揮して総帥に就任。U.C.0071年の「復讐人類生存戦」の発表でジオニズム主義者の絶大な支持を獲得して、政治的な権力基盤を確固たるものとする。

ジオン独立戦争という歴史の事象をギレン・ザビの視点から見る

のであれば、前述の「復讐人類生存戦」がキーワードとなる。ア・バオア・クー攻防戦を控えてギレンが行った演説の一端「人類は我ら選ばれた優良種たるジオン国国民に管理運営されて、初めて永久に生き延びることができる。」つまり、彼にとってのジオン独立戦争は、単にジオン公国の独立承認を求める戦いにはとどまらず、自らの政治目標を達成するための手段だったといえるだろう。父デギンとの対話に預されたギレンの言葉、「せっかく減った人口です。これ以上増やさずに、優良な人類だけを残します。人類の永遠の存続のために。地球圏を汚さぬためにです。」この言葉こそが、ギレン・ザビが目指した理想を端的に表したものだといえるのかも知れない。

戦略家としてのギレン・ザビ

ギレン・ザビはジオン公国総帥として政治と軍事の両面を掌握していた。しかし、彼にとって戦争が政治の一形態であったことは前述の通りである。どちらかといえばギレンは政治家であり、軍部に対して最終的な決定権を有していたが、純粋に軍人であったとは言えない。自らの政治目標に準じた戦略を固め立てることについては秀でていたものの、その目標達成に拘るあまりに戦略的失敗を犯したという事実は否定できないであろう。その最たる例が、ソロモン海戦に代表される戦略予備の思想といえる。

しかし、目的達成のためにギレンが下した判断は実に冷静かつ合理的なものであった。一週間戦争におけるコロニー住民の大撤退

役やコロニー落しなどは、彼の政治的目標を満すために必要不可欠なステップであったといえる。彼にとって、地球連邦政府の庇護の下で資源を浪費する大衆は不要なものであり、そうした衆愚の温床となる地球にダメージを与えることも有益であったに違いない。しかし、ギレンにとっての誤算は、戦争が思惑を外れて長期戦になってしまったことであろう。自らの政治的な意図を満たしつつ、短期決戦による戦争終結を実現する——彼が描いた戦略のほころびは、さまざまな要因も重なって緩やかな敗北へと繋がっていったのである。

最終局面に噴出したギレン・ザビの失策

ギレン・ザビはア・バオア・クー攻防戦の戦中、父親しの罪を糾弾される形でキシリア・ザビによって殺害され、歴史の舞台から退場することとなった。この戦いは、一年戦争における彼の政治的、戦略的な失策が一気に噴出した場といえるだろう。

そのひとつが、デギン・ザビの隠微であった。ギレンの立場からすれば、デギン公王の排除は政治的基盤を磐石とするために有効な手段であったのは確かである。しかし、そのために彼は予定時刻を繰り上げてソーラ・レイを射撃している。このことによって、地球連邦軍への損害は想定よりも低いものとなり、攻防戦での戦略的劣勢を助長する結果となった。ギレンの政治的判断が戦争の特殊性に介入したために、戦略的なミスに繋がったのである。

さらに、デギン隠微の事実をキシリアに隠されたことによって、彼女に糾弾の口実を与えたことも、ギレンの確証を無く要因となった。無論、彼とて妹が父親しの罪で自らを糾弾する可能性を無視していたとは考えにくい。しかし、ジオン公国の進路を占う戦場で実力行使に訴えることまでは推測できなかったであろう。ギレンがキシリアを敵軍として軽視していたということも、彼の判断を誤らせた要因のひとつだったのかもしれない。彼は「ヒットラーの尻尾」と評したデギン・ザビが強らした「ヒットラーは身内に殺されたのだぞ」という言葉。聞かすも、ギレン・ザビはその言葉通りの戦術を遂げたのである。

Column

ギレンの志に殉じた信奉者、エギーユ・デラーズ

ギレン・ザビという人物を論ずる場合、目的のためには手段を選ばない冷酷な独裁者という見方をされることがほとんどであろう。しかし、彼は戦前戦後を通じて多くの信奉者を得ている。そのひとりがエギーユ・デラーズ大佐(当時)である。

エギーユ・デラーズは、クワジン級「グワテン」を乗艦としてア・バオア・クー攻防戦にも参戦している。ザビ家に縁のある者のみに拝領が許されたこの戦艦を彼が乗艦していることから、いかに彼がギレンの信頼を得ていたかが伺い知れる。デラーズもまた、ギレンに対して熱烈な敬愛を抱いていた。その心酔ぶりは、後のデラーズ紛争でグワテンの講見室にギレンの胸像を飾るほどであった。事件の渦中にあった地球連邦軍中將ジョン・コーウェンは、デラーズを「ギレン・ザビの亡霊」と評したといわれている。

ア・バオア・クー攻防戦の最中にギレン戦死の報を受けたデラーズは、即座にキリシアによる謀殺であることを確信したという。その直後に彼は麾下の艦隊をまとめて戦域から離脱。このことも、攻防戦における公国軍の敗北を助長する要因となったといえよう。



01
GIHREN ZABI

キシリア・ザビ

KYCILIA ZABI



兄の後塵を押し続けてきた公国のナンバー2

ザビ家の血統であり、兄ギレン・ザビに並ぶ実力者。いち早くMSやニュータイプの戦略的価値に着目し、ギレンの政治的な対立者として公国に確固たる地位を築いた女性。それが彼女の一般的な評価であるだろう。しかし、実際にキシリアがギレンと同じ舞台に上がったのは、兄よりもかなり遅れてからのことである。彼女が物心ついたときには、兄はすでに自らの権力基盤を確立しつつあった。兄に劣らぬ権力志向の持ち主であったキシリアは、その差を縮めるために奔走することとなる。そうした活動は、彼女にMSをはじめとする新規技術や情報への先見性を与えていった。ギレンとは異なる基盤に権力の拠り所を求める彼女の政治的な成長は、ジオン公国の権力図を二分する危険性を孕みつつも、その運営に多大

な貢献をしていったのである。

ギレンに比肩する勢力を築いていったキシリアだったが、兄と大きく異なる点があった。それは政治的思想性の希薄さである。ギレンが「慢性人類生存説」をその思想的立脚点に定めていたのに対し、キシリアは確固たる政治思想を表明することがなかった。当然、挙国一致体制の公国内で、最高指導者の思想に表立って反論することは、その根柢を揺るがす行為であることに間違いはない。しかし、彼女が権力者としての方向性を示さなかったことは、ギレンが彼女を政治的な対立者として軽視する背景となり得たのである。それこそが、キシリアが終戦直前までナンバー2の地位に甘んじた要因のひとつともいえる。

権力奪取を主眼に置いたキシリアの戦略

キシリアの先見性は、軍事面においても発揮された。彼女がギレンに先んじてMSの開発を推進したことは有名であり、MSを中心とした機動部隊の設立にも力を注いでいる(結果的に兄弟間の軋轢を生むこととなったが)。その部隊が彼に彼女が指揮し、その軍事的基盤にもなった突撃機動隊である。地球進攻作戦において稀少金属資源や化石燃料資源の搬送を行った地球方面軍は、この突撃機動隊を中心に編成されていた。また、地球進攻後のU.C.0079年5月に設立された戦時海洋情報部隊(公国軍潜水部隊とも呼ばれる)もキシリア麾下の部隊であり、地球上の通商路や情報収集を主任務としていた。

しかし、キシリアが地球方面軍と戦時海洋情報部隊に求めたものは、単純に戦果のみではなかった。地球で探査された鉱物資源はギレンへ過少に報告され、その一部は彼女の指示で隠匿された。その量は公国を10年に渡って支えるに十分だったと伝えられている。また、戦時海洋情報部隊によって隠された機密情報は、すべてキシリアの元を運って他の機関へと伝えられた。これによって彼女は、その情報のすべてを掌握することができたのである。物質と情報という、戦争におけるアドバンテージを握ることで、キシリアはギレンに対抗しうる権力基盤を求めたのである。

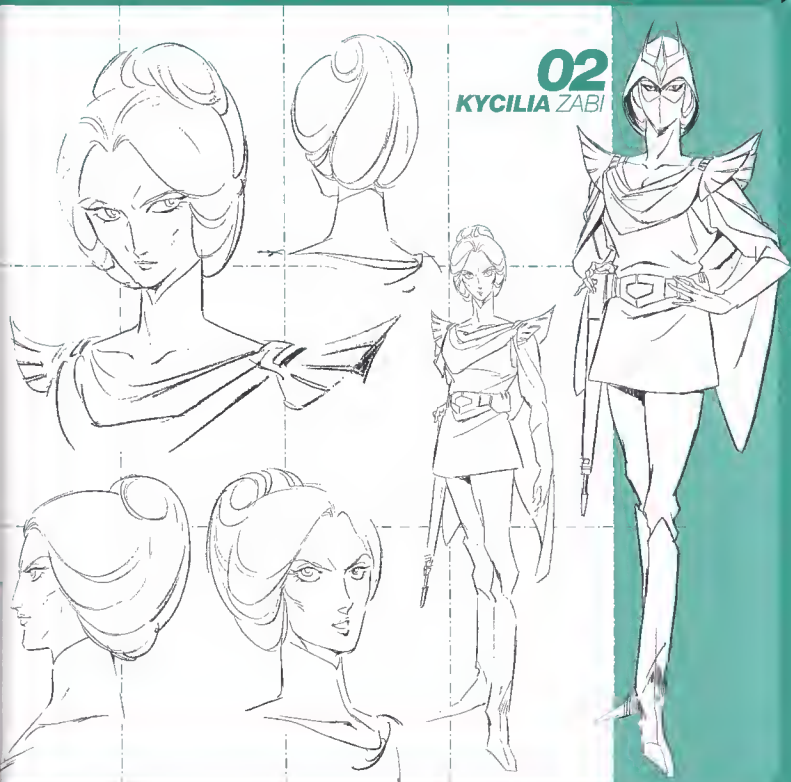
シャア・アズナブル重用に隠された政治的意図

キシリアは徹底した実利主義者であった。目的を達成するためには、私情や面子を押し殺すことを厭わなかった人物であったといえるだろう。その例のひとつが、シャア・アズナブル大佐の重用である。キシリアは彼がジオン・ダイクンの遺児キャスバル・ダイクンであることに早い段階から気付いていた。そして、弟ガルマ・ザビの死が、シャアの謀略によるものであることも見抜いていたといわれている。それでもなお、彼女はシャアに切り札ともいえるニュータイプ部隊の指揮を任せ、自らの手元に置こうとしたのである。ここに彼女の恠異な判断が垣間見える。

シャア・アズナブルの名はエース・パイロットとして公国内に広く

知られ、人望も厚い。さらに、彼がジオン・ダイクンの息子であるという事実が(噂という形にせよ)流布されれば、彼女の政治思想的脆弱性を補って余りある効果が得られる。そうした思惑があったのだと考えられる。無論、彼女には父デキンによるジオン・ダイクンの暗殺という弱みはあったが、それはガルマを謀殺したシャアにとっても同様であった。「ニュータイプによる人の革新」の実現という共通の目的のために(キシリアにとっては政治的な名目でしかなかったが)、弟を殺した者と平然と共闘する。そこからは、肉親の死さえ自らの手札として利用するキシリア・ザビという謀略家の本質が窺える。

02 KYCILIA ZABI



ア・バオア・クーに潰えたキシリアの野心

ア・バオア・クー攻防戦直前のギレンによるデギン暗殺は、ギレンからの権力奪取を狙うキシリアにとって千載一遇のチャンスであった。ギレンとともにア・バオア・クー要塞の司令室で指揮を執っていた彼女は、公国軍の優勢をみるやギレンに歩み寄り、無杖用のレーザー・ライフルで彼の頭部を撃ち抜いた。「父殺しの罪はたとえ罪紳であっても免れることはできない。真贋のある者は、この戦い裏で、法廷に申し立てい」――彼女が声高に宣言し、指揮権を奪取することに成功したのである。

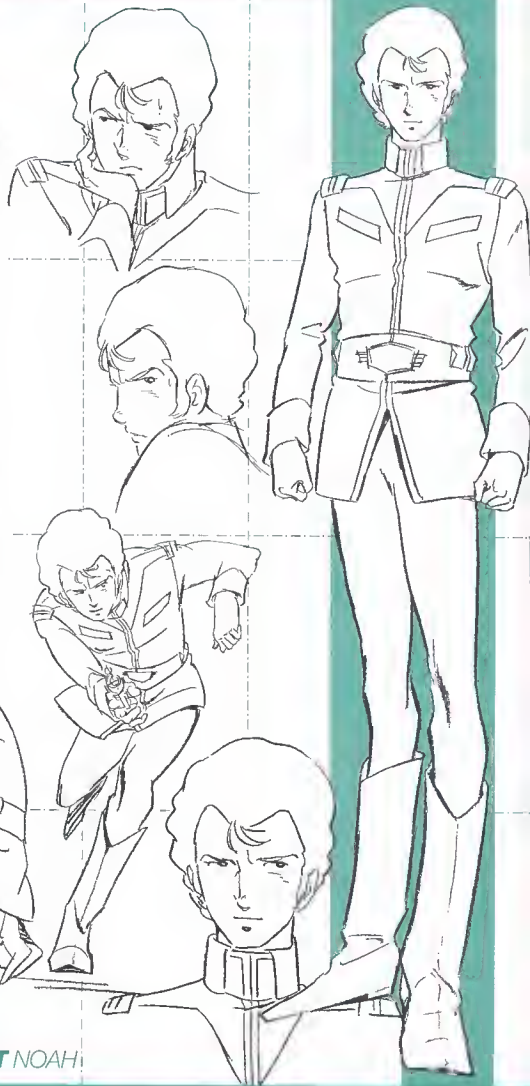
彼女が肉親の情に厚い人物であったかと問われれば、前述のシャアとの取引などを窺っても疑問を抱かざるを得ない。彼女はギ

レン殺害の理由を「父殺し」に求めることで、政治的意図ではないことを強調しようとしたのである。戦後の権力闘争で勝利することよりも、密室での裏面的な手段によって権力を奪取することを選んだ彼女の意図は宣かではない。キシリアに統を突きつけられたギレンの「元恨はよせ」という言葉に対し、彼女は「意外と……兄上も甘いようで」と返したといわれている。この暗殺劇に彼女なりの政治的計算があったことは間違いない。しかし、手中に収めた権力を行使する暇もなくキシリアが戦死した今となっては、その真摯は闇の中に埋もれてしまっているのである。

〈WB〉隊を陰から支えた名將、レビル將軍

ブライトたち〈WB〉隊を語る上で忘れてはならないのが、彼らの後ろ盾となったレビル將軍（階級は大将）の存在である。地球連邦軍の最高司令官のひとりであったレビル將軍は、ルウム戦役においてジオン公国軍に捕らえられるが、南極条約の締結直前に救出されて奇跡の生還を果たした。その際、公国に対する抗戦を主張したものが、有名な「ジオンに兵なし」の演説である。これにより、地球連邦軍のカリスマ的存在として支持を集め、軍部に対して大きな影響力を発揮していくこととなる。

本来であれば、最重要機密である「V作戦」に関与した〈WB〉隊の民間人は、処刑されても不思議ではない状況であった。しかし、レビル將軍の判断によって彼らは正式な軍属に任じられ、「ニュータイプ部隊」として存在感を強めていく。レビル將軍は〈WB〉隊の尋常ならざる戦果を以って、彼らをニュータイプであると考えていたらしい。独断で〈WB〉隊に補給の便宜を図り、正規兵として扱うべく尽力した点。さらに「彼らのニュータイプ能力のテストだ。私も率直に彼らの力に期待してみたいのだ」という言葉を残したことが、その証明といえる。しかし、レビル將軍の考え方は地球連邦軍において異端であり、主流派には疎ましく映ったに違いない。レビル將軍は地球連邦軍随一の軍略家であり、実績を以って発言力を獲得した人物である。ニュータイプに対しても理解を示し、〈WB〉隊の強力な後ろ盾となった。その後が星一号作戦半ばで戦死したことは、後の地球連邦軍にとって大きな分岐点であったことは、多くの人々が認めるところであろう。





ブライト・ノア

BRIGHT NOAH

過酷な一年戦争を戦い抜いた若き艦長

ブライト・ノアは、ホワイトベース戦後新編艦隊 (WB) の艦長として広くその名が知られている。しかし、U.C.0079年9月18日の公敵軍特務部隊によるサイド7襲撃 (『サイド7過激戦』) がなければ、彼の存在は歴史の中に埋もれていったはずである。この襲撃で (WB) 乗員の大半が戦死し、さらに艦長のバオロ・カシアス中佐も負傷したために、その補佐として彼が (WB) の指揮を執ることになったことはあまりに有名である。バオロ中佐の下船後、実質的に (WB) の指揮を執った彼の手腕は、確かに評価すべきものであったといえる。士官候補生や民間人といった素人の集団を率いて、ジオン公敵軍の執拗な攻撃を切り抜けた指揮能力は注目に値するだろう。ただし、軍の指揮に縛られない (縛られることを知らない) (WB) 隊のクルーをまとめるのが相当な業務であったことは想像に

欠けない。過労の余り倒れることさえあったというエピソードが、彼の苦勞を物語っているといえよう。

ブライトは一年戦争の戦史において脚光を浴びる人物であった (WB) 隊の指揮官だったということもあるが、しかし、彼はあくまで一介の部隊指揮官にすぎず、一年戦争の大局を知る立場にはなかった。いかに的確な状況判断能力を持っていたとしても、彼に許されていたのは地球連邦軍上層部の戦理部隊に従って (WB) 隊を率いていくことだけだったのである。彼に彼は地球連邦軍を代表する部隊指揮官に成長し、数々の戦役で軍功を上げていくことになる。その土台には、一年戦争で培った実践経験があったことは間違いないだろう。

ブライトを悩ませ、支えた (WB) 隊の人間関係

正規の軍人ではない (WB) 隊をまとめ上げ、地球連邦軍の勝利に貢献したブライトだったが、部隊内の人間関係には底心していたようである。特にRX-78のパイロット、アムロ・レイとの関係は、彼の頭を悩ませる問題であった。ブライトは彼のパイロットとしての才能を高く評価していたが、それ故に彼に対して厳しく接することが多かったという。アムロ自身が内向的な性格だったということもあってふたりの衝突は絶えず、それが転じてアムロの脱走という事件を引き起こすこともあったのである。元々は民間人にすぎない (WB) 隊のクルーを戦時下という異常な状況の中で統率していくということが、どれだけ困難なことであるか。その心労は容易に想像がつくのである。

ブライトは正規の訓練過程を受けてきた士官候補生であり、生存した (WB) 乗員のなかでもっとも部隊指揮に適した人材であったといえる。とはいえ、その当時彼は19歳の青年であった。(WB) 隊の指揮という重荷に耐えかね、精神的な支えを欲したとしても不思議ではないだろう。そんな彼の公私に遡る支えとなったのが、民間人ながら (WB) の操舵手となったミライ・ヤシマと、最初から乗組していたパイロット候補生のリュウ・ホセイであった。ミライ・ヤシマはのちにブライトと結婚。一男一女をもうけ、良き妻良き母として家族を支えたといわれている。ブライトがいかに彼女たちに心を開いていたかが窺えるエピソードである。

ニュータイプ部隊としての務めを全うしたブライトの采配

ア・バオア・クー攻防戦は、ブライトをはじめとする (WB) 隊のクルーにとっても最後の戦場となった。ブライトは選定する戦場を突破して (WB) をア・バオア・クーに上陸させ、速やかに白兵戦への移行指示を出して自らも陣頭に立った。このときの彼の手腕は、迅速かつ的確であり、非常に優れたものであったといわれている。一年戦争の激戦を勝ち抜けてきた彼の指揮官としての成長の証が裏付けた結果といえるだろう。

また、要塞陥落直後には、暴走する (WB) からの退避をいち早く指示し、生存者全員を脱出させることに成功している。この脱出劇を盛り補った背景には、脱出の手筈を指示するアムロ・レイの「声」

があったという見方が一般的となっている。ブライトのみならず、(WB) 隊の主要クルー全員がこの「声」を耳にした (という表現は正確でないのかもしれない) という記録が残っているためである。しかし、ブライトは戦後の検査でニュータイプとしての素養がないと判断され、同様に追いやらねながらも宇宙へ出ることを許された。彼はその後に数々の戦役に参加し、アムロに頼って生まれたニュータイプとともに戦うこととなる。ブライトがニュータイプではないとされたことが、結果的に彼が「人の革新」の片鱗を目撃するきっかけとなったのは、ある意味では皮肉なことといえるだろう。

ア・バオア・クー戦のパイロット達

エース・パイロットとは

MSは宇宙世紀の戦争の様相を一変させた革命的な兵器である。そのパイロットたちはMS戦術を支える重要な兵種であると同時に戦場の主役であったともいえる。なかでも、旧世紀の世界大戦に登場する撃墜王の如き活躍を見せたパイロットたちは“エース・パイロット”と呼ばれ、士気を左右するほどの存在となっていた。

宇宙世紀においては、5機以上のMSを撃墜したパイロットにエースの称号が与えられた。しかし、一年戦争開戦当初の地球連邦軍にはMSが存在しなかったため、5隻の艦艇を撃沈した“シップス・エース”がすなわちエース・パイロットであった。戦局が推移して地球連邦軍にもMSが配備されるようになると、シップス・エースとMSエースは区別されるようになっていった。なお、5機(5隻)撃破を以てエースと呼称する形式は地球連邦軍とジオン公国軍で同じだったが、その認定基準には差があった。ジオン公国軍では、自機の交戦記録に加えて僚機の証言を合わせ、厳格な撃墜確認を行っていた。それに対して地球連邦軍は自己申告制が中心であったため、そのスコアは信頼性に欠ける部分があったと言わざるを得ない。

撃墜スコアを重ねて勝利に貢献したパイロットが、エースと呼ばれる。しかし、エース・パイロットの存在がもたらすものは、単純に戦果のみではなかった。例えば、ジオン公国軍は一週間戦争とルウム戦役で華々しい戦果を挙げたエース・パイロットたちの活躍を、内外に対して大々的に宣伝した。これは戦意高揚を目的とした情宣活動であり、そうしてその名を広く知らしめたエース・パイロットたちは、味方からは尊敬と羨望の念で、敵からは畏怖の感情を以て受け入れられたのである。

ただし、これらエース・パイロットの記録に疑問を呈する意見もある。ジオン公国軍のトップ・エースの中には200機近いMS撃墜スコアを残した者もいる。しかし、一年戦争はその名の通り一年間という短期間の戦争であり、しかも地球連邦軍MSは戦争終盤になってようやく実戦配備されるようになった。その状況で、それだけの撃墜スコアを残すことは甚だ不自然であるというのが、疑問の根拠となっている。また、エース・パイロットたちの総撃墜数と、実際のMSの配備数が食い違っているという指摘も存在する。確かにこれら資料の矛盾は否定できないものであり、彼らの戦果が情宣活動の過程で過大に宣伝されていたという側面もあったのであろう。無論、戦史に名を残すエースたちの実力に異論を挟むことはできない。しかし、その記録には彼らの活躍を政治的に利用した軍上層部の思惑が絡んでいたという点も理解すべきなのである。

戦争という行為は、決して肯定できるものでない。これは人類全体の共通理念であろう。しかし、それでも人々は、その戦争の中で華々しい活躍を見せたエース・パイロットに英雄の姿を重ねる。それは、己の技量の限りを尽くして母国のために命を賭けた者たちの生き様に、尊敬と情念の感情を禁じえないからではないだろうか。



公国軍エース・パイロットの光と影

一週間の戦争とルウム戦役で圧倒的な勝利を取ったジオン公国軍は、その時期に数多くのエース・パイロットを輩出した。短期決戦を望んだ軍部は彼らの戦果を大いに喧伝し、その存在を国内外に知らしめることとなる。緒戦の勝利で上がった士気を維持し、優勢を保ったまま戦局を乗り切ろうとしたのである。同時に、戦意高揚を目的に年齢不問の昇進を行い、エース・パイロットもその対象となった。しかしながら、当のエースたちの中には、そうした過大評価に複雑な感情を抱く者も少なくなかったといわれている。

彼らの活躍は、一般のパイロットたちの規範となり目標にもなった。ジオン公国軍では昇進制度の上限がなかったため、シャア・アズナブルのように戦果次第で佐官にまで昇進できるとする実例を前に、一般兵の士気は否が応にも上がったのである。サイド7連続戦で地球連邦軍のRX-78と交戦したジーン軍曹などは、その最たる例といえる(彼の場合は勲功を挙げて命令違反を犯したために戦死することになったのだが)。

しかし、一年戦争終盤になると、ジオン公国軍が誇る人的優位性にも暗りが見え始める。初期のジオン公国軍MSの脱出機構に問題があったことから、開戦当初から従軍してきたベテランパイロットの数が徐々に減り始め、パイロットの質が低下していったのである。未だ衰えを見せないエースたちの奮闘も戦局全体の逆転には結びつかず、ア・バオア・クーでの敗北へと繋がっていく。ジオン公国軍の瓦解とともに、純羅星のごときエースたちの存在は歴史の陰に消えていったのである。



地球連邦軍の勝利の陰で戦果を残したエースたち

地球連邦軍では量産型MSの配備が一年戦争終盤であったため、エース・パイロットはジオン公国軍に比べると圧倒的に少ない。RX-78を駆けて異常なほどの戦果を挙げたアムロ・レイに注目が集まるのは、そうした背景もある。しかし、ジオン公国軍のエース・パイロットに比肩する活躍を見せたパイロットたちが存在しなかった訳ではない。アムロ・レイを超える149機のMS撃墜数を残したテネス・A・ユング大佐や、“踊る黒い死神”の異名を持つリド・ウォルフ少佐などが、地球連邦軍のトップ・エースとして名を残している。ただし、テネス・A・ユング大佐の撃墜スコアについてはあまりに突出した数字であるため、宣伝効果を狙ったデータの捏造、アムロ・レイの異常な戦果を隠蔽するための偽装工作など、さまざまな説が囁かれている。余談ではあるが、地球連邦軍には航空機を駆ったエース・パイロットも存在する。MSばかりに脚光が浴びるが、こうした通常兵器のパイロットたちも命を賭けて戦っていたことを忘れてはならないだろう。

しかし、彼らの活躍はジオン公国軍のトップ・エースほどには脚光を浴びなかったようである。地球連邦軍の全体主義的な思想が、一般パイロットを大々的に評価することをよしとしなかったのであろう。事実、一般にその名が知られているのは、RX-78の存在とともに伝説的な扱いを受けるアムロ・レイ程度であろう。一般兵への待遇が悪かったことから判る通り、地球連邦軍上層部にとってエース・パイロットか兵の士気に与える影響はさほど重要な事柄ではなかったのだと推察できるのである。

アムロ・レイ

AMURO RAY



伝説のエース・パイロットの真実

一年戦争における地球連邦軍のMSパイロットと聞かれます名前が浮かぶのは、この少年であろう。アムロ・レイ——一年戦争最高のニュータイプと謳われる。地球連邦軍トップ・エースのひとり。一年戦争終結時の階級は少尉(曹長の異説あり)、MS撃墜数142機、艦艇撃破数9隻を数え、彼が事実上の地球連邦軍No.1パイロットであるとする意見も多い。しかし、その驚異的な戦果とは裏腹に、彼は決して生粋の戦士ではなかった。

アムロ・レイが本来軍人ではなく、一介の民間人に過ぎなかったことは、現在では多くの人々に知られている事実である。サイド7遭難戦の混乱の中、RX-78に搭乗してジオン公国軍MS2機を撃破した彼は、そのままRX-78のメインパイロットとして(WB)隊の中

核を担うことを余儀なくされる。しかし、彼は本質的には好戦的な性格ではなく、時には出撃拒否をすることさえあった。また、プライト・ノアに過小評価されていると感じて(WB)から脱走するという事件も起こしている。突発的な感情の爆発に任せ、後先考えずに行動する——いかに常人離れた才能を発揮しようとも、彼は華やかな神経をもった15歳の少年に過ぎなかったといえるだろう。

しかし、他者との交流や衝突が、彼の成長を促すこととなる。生き延びるためには戦わざるを得ない現実を受け入れ、自らが成し得る最善を尽くす。地球連邦軍唯一のエース・パイロットの驚異的な戦果は、そのような過程を経て積み上げられていったのである。



アムロ・レイの成長を促した強敵

(WB)隊は地球連邦軍内でもっとも多くの戦場を転戦した部隊といっても過言ではないだろう。サイド7から脱出して以降、北米、ユーラシア大陸、ジャブロー、そして再び宇宙へと上がり、さまざまな戦場を経験してきた。その経験が、アムロのパイロットとしての成長を促したといえる。彼はRX-78に乗った瞬間から軍閥のパイロットだった訳ではない。最初期の彼は、未熟な少年兵に過ぎなかったのである。

その戦いの中でアムロ・レイに強い影響を与えたジオン公国軍パイロットとして、ふたりの名が挙げられるだろう。ひとりとは「赤い彗星」シャア・アズナブル。サイド7脱出戦で初めて彼と戦ったアムロ・レイは、その圧倒的な技量を目の当たりにして、彼の存在を強く意識して

いったといわれている。また、早稲にパイロット同士としての関係だけではなく、ニュータイプとしての対立関係をして、二人をライバルとする意見が大半である。

そしてもうひとりとは、「青い巨星」ランバ・ラルである。彼は単にアムロにとっての強敵であったというだけでなく、アムロ・レイが初めて出会った生き物の敵でもあった。アムロ・レイは(WB)を脱走した際に彼と出会い、生まれて初めて己の方で勝ちたいと思ったと伝えられている。そうした意味では、ランバ・ラルはアムロ・レイにパイロットとしての自分を強く意識させ、技量の向上を促した存在であったといえるだろう。

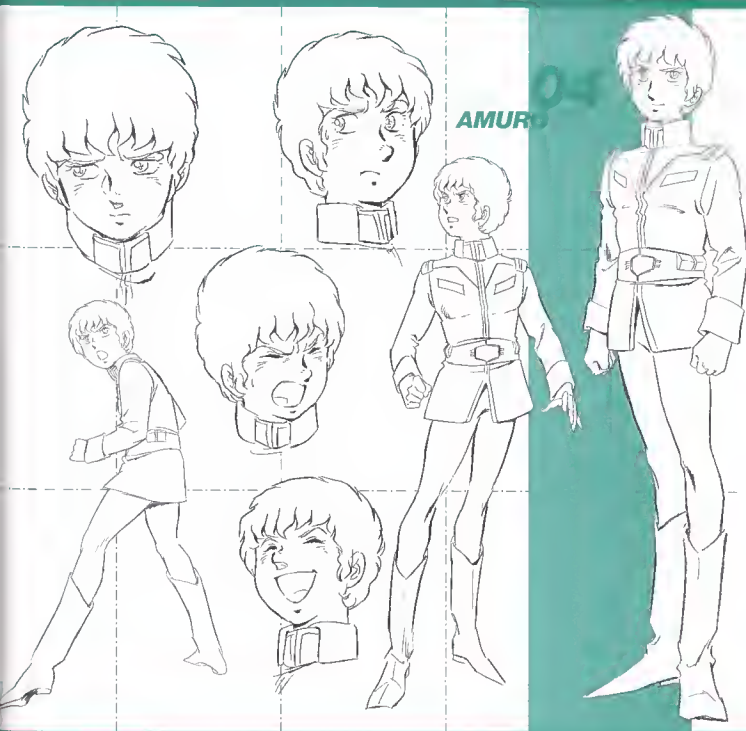
ニュータイプへの目覚め

一年戦争最高のニュータイプと評されることが多いアムロ・レイだが、パイロットとしての技量同様、ニュータイプへの覚醒も時を迫って進んでいったといわれている。ただし、何時を以てニュータイプへと覚醒したかという境界については、諸説あって定まらない。操縦マニュアルを一読しただけでRX-78の操縦法を理解し、ジオン公国軍MSを撃破したことを根拠に覚醒とする意見もあれば、地球に降りてから度々見せた異常なまでの動きの滑りを以て早い段階から覚醒が進んでいたという見方も存在する。

確かに、訓練を受けていない15歳の少年がMSを操縦して公国軍のMSを撃破したという事実は、そのパイロットがニュータイプであると信じさせるに足るものであろう。地球連邦軍のレビル将軍

は、オデッサ作戦における(WB)隊への過度な負担に異議を唱えたエルラン中将に対して、このように語ったといわれている——「訓練もせずに我が軍のMSのガンダムを使いこなしたアムロという少年兵な……。あれは、異常ではないのか?」。冷静な判断力を有する老将にこうまで言わせるほど、アムロ・レイの残した戦果は群を抜いていたのである。

一年戦争終結後、アムロ・レイは地球連邦軍の検査によってニュータイプとの判定を受けた。ニュータイプを危険視した地球連邦軍によって「檻の中の鳥」となったアムロ・レイは、その後7年もの間、飛び立つことを許されずに苦悶の日々を過ごしたのである。



ア・バオア・クーでアムロ・レイたちを導いた“声”

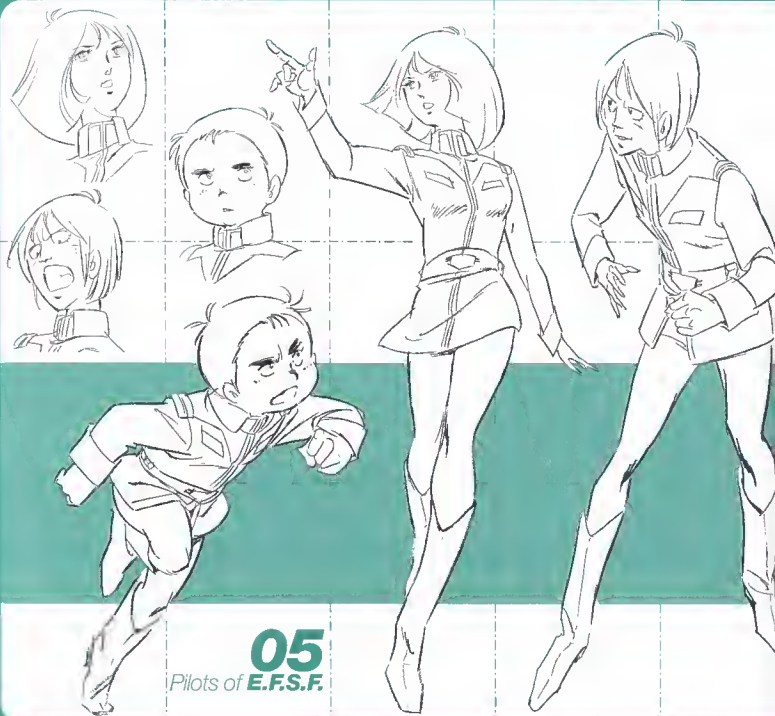
ア・バオア・クー攻防戦の直前、アムロ・レイは作戦の成否に不安を抱く(WB)隊のクルーに対して、ニュータイプの特長と断言して作戦の成功を保証した。しかし、彼はその言葉の真偽を問われ、気休めであると述懐している。ア・バオア・クー攻防戦は、アムロ・レイにそう言わせるほどの激戦が予想されたのである。

この戦いの最中、シャア・アズナブルのMSN-02と対峙したアムロ・レイは「予測をきければなすといふ意味でシャアに勝つ」と言い放ったとされる。これまでのアムロ・レイの戦いの理由は、あくまで受動的なものであった。だが、先の言葉はアムロ・レイが主动とながらも戦いの終結という目標を定めたことを示している。そこからアムロ・レイの成長を見て取ることができよう。

結局、アムロ・レイはシャア・アズナブルにRX-78を相討ちで撃破され、ア・バオア・クー内部でふたりは生身で対決することとなる。

その戦いの中、アムロ・レイは「ニュータイプは義し合う道具ではない」というララァ・スン(思惟ともいえる)を聞いたといわれている。この確信めいた言葉は、以後のアムロ・レイの行動にとって大きな意味を与えたといえよう。同時に、彼とシャア・アズナブルとの決定的な決裂を意味するものでもあったのである。

ララァ・スンの言葉通り、アムロ・レイは自らのニュータイプ能力を発揮して(WB)隊の脱出を助けた。彼らがアムロ・レイの「声」に導かれ、ア・バオア・クー要塞からの脱出を果たしたという事実は、現在ではよく知られている。そして、アムロ・レイ自身の脱出を(WB)の3人の子供たちが助けた、という記録も残っている。アムロ・レイと子供たちの成したことが、ニュータイプによる人の革新の片鱗を示しているといえるのではないだろうか。



05 Pilots of E.F.S.F.

〈WB〉隊を支えたパイロットたち

〈WB〉隊の驚異的な活躍がアムロ・レイの働きに寄るところに大きいことは間違いない。しかし、アムロ・レイのみが〈WB〉隊を支えていたという認識は誤りである。アムロ・レイ以外のパイロットたちが残した戦果は、決して低いものではなかった。むしろ、民間人にすぎなかった彼らが正規パイロットに引けを取らない戦果を挙げた点は、驚嘆に値するといえよう。

アムロ・レイに次ぐ〈WB〉隊の主要パイロットとして、セイラ・マクス少尉、カイ・シデン少尉、ハヤト・コバヤシ曹長の3名が挙げられる(それぞれの階級は一年戦争終結時のもの)。アムロ・レイの突出した撃墜数に隠れがちではあるが、彼らの撃墜スコアも非常に高いものであった。それぞれがエースと称されるに足る戦果を挙げたのである。しかし、それ以上に注目すべきは、彼らがパイロット・チームとして機能していた点であろう。正規の訓練を受けた

パイロットならいざ知らず、突然戦うことを強要された素人の集団が、わずか2、3ヶ月の間に機動兵器の連携戦術を実践できるようになる。その事実には、レビル将軍が彼らにニュータイプの可能性を期待したとしても、不思議ではないだろう。

なお、〈WB〉隊には彼らの他にもパイロット要員が籍を置いていた。ランバ・ラル隊の残存兵との交戦で戦死したリュウ・ホセイ曹長(戦死後3階級特進で大尉)、補充要員として〈WB〉に配属されたスレッガー・ロウ中尉、予備パイロットを務めたジョブ・ジョンらがこれにあたる。伝説的な活躍を見せたアムロ・レイばかりに脚光が浴びる〈WB〉隊のパイロットだが、彼らのバックアップがあってこそこの戦果であったことを忘れてはならない。



地球連邦軍パイロット

Pilots of E.F.S.F.

運命に翻弄された少女——セイラ・マス

セイラ・マスは、サイド7通戦戦が発生した際、看護学生として同コロニーに住んでいたことから(WB)に乗組した。人手不足だったこともあり、彼女はブリッジ要員として通信を担当するようになる。しかし、RX-78を無断使用した事件をきっかけにパイロットに抜擢され、FF-X7Bst("008"のコードが与えられていたとされる)を乗機として戦線に参加するようになった。ただし、Gファイターに搭乗していたとする説も存在する。パイロットとしての能力は非常に高かったといわれ、(WB)側の中ではアムロ・レイに次ぐパイロットであったとされる。しかし、その撃墜スコアに関しては不明である。

セイラ・マスがパイロットとして抜擢された背景には、彼女のニュータイプの露身を欲する地球連邦軍上層部の思惑があったと

いうのが一般的な見方である。RX-78の無断使用を不問とする代償として、軍のモルモットになることを強要したのである。

しかし、彼女の戦いは強要されたものだけではなかった。セイラ・マス 本名アルテイシア・ソム・ダイクン、ジョン・ダイクンの娘であり、シャア・アズナブルことキャスバル・ダイクンの妹。彼女にとつての戦いは、道を迷った兄を止めるための戦いでもあった。しかし、彼女の度量なる覚悟も実ることはなく、兄妹は異なる道を歩んでいく。そして、ア・バオア・クー攻防戦の際、アムロ・レイとキャスバルの争いに割って入ったセイラ・マスは、兄妹の確係がもたらす修復不可能であることを思い知らされる。これを機に、兄がさらなる戦いに身を投じていく一方、妹は戦いから身を引いた。彼女の戦いは、一年戦争の終結とともに幕を閉じたのである。

「軟弱者」が見出した戦う意義——カイ・シデン

「それでも男ですか、軟弱者」——カイ・シデンに対してセイラ・マスが言い放った有名な言葉である。その言葉通り、カイ・シデンは日和見主義で何事にも消極的な少年であった。サイド7通戦戦によって(WB)に避難した彼は、大型特殊車両の免許を持っていたことからRX-77("C-108"のコードが与えられていた)のメイン・パイロットとして登用されることとなる。しかし、当初は積極的に戦間には参加することもなく、援護を中心に行動するとさえ公言したといわれている。クルー全体が困難な状況を甘受せざるを得なかった(WB)において、彼の存在はアウトローそのものであったといえるだろう。

カイ・シデンにとつて(WB)のクルーとして戦うことは、あくまで自らを取り巻く状況にすぎなかった。そこに自分にとつての戦う意味を見出せなかったことが、彼を「軟弱者」にした最大の要因だったのであ

う。その違和感ゆえに、カイ・シデンは(WB)がベルファスト基地に寄港した際、一度は艦から降りている。しかし、ジオン公国軍の女スパイ107号(ミハル・ラトキエという名の少女だったという)との交流を経て、彼は再び(WB)に戻った。(WB)側のクルーたちは、それ以降のカイ・シデンを変わったと評したという。その証が、彼がジャブロー侵襲作戦の際に吐いたこの言葉である——「ミハル、俺はもう悲しまないぜ。お前みたいな子を増やさせないためにジオンを叩く。徹底的にな」。

最終的にカイ・シデンはア・バオア・クー攻防戦まで生き残り、この戦いで機体を失うまで奮戦したのちに仲間たちとともに脱出を果たしている。アムロ・レイの活躍の際に離れがちなが、カイ・シデンもまた一年戦争を戦い抜いた歴戦のパイロットだったのである。

劣等感との戦いの果てに——ハヤト・コバヤシ

ハヤト・コバヤシもほかの(WB)クルーの大半と同じく、サイド7通戦戦に巻き込まれて(WB)に避難した民間人のひとりであった。当初は対空砲臺の射手などを担当していたが、後にRX-75の砲撃手を務めるようになる。リュウ・ホセイの死後は単座式となったRX-75のメイン・パイロットとなり、ジャブローでRX-75に代わりRX-77が配属されると、「C-109」のコードが与えられたこの機体に搭乗することとなった。一躍には、彼はこのRX-77には搭乗せず、ア・バオア・クー攻防戦までRX-75に搭乗していたともいわれる。

ハヤト・コバヤシは取り立てて好戦的な性格ではなく、どちらかといえば大人しい性格の持ち主であった。その彼をパイロットへと順次立てたのは、アムロ・レイへのライバル心にあるところが大きい。サイド7居住時、ハヤト・コバヤシとアムロ・レイは友人関係にあった。同年代のアムロ・レイがパイロットとして華々しい戦果を挙げたのを間

近に見て、造る感情もあったのであろう。しかし、後のパイロットとしての能力は、アムロ・レイはおろかセイラ・マスやカイ・シデンにも劣っていたという見方が大半を占める。ソロモン攻防戦の最中に負傷した彼は、看護に当たったフラウ・ボウに「アムロに敵うたい、敵うたいって思ってた。このザマだ。惜けない」と語つたといわれている。彼が感じていた劣等感は、余人には計れないものであったに違いない。

結局、ハヤト・コバヤシとアムロ・レイとの差は埋まることはなかった。しかし、彼がア・バオア・クー攻防戦も生き抜いて終戦を迎えたという事実は、彼自身が思うほどパイロットとしての能力が低くはなかったことの証明ではないだろうか。彼の不遇は、比較対象としてアムロ・レイという類稀なニュータイプを選んでしまったことだったのであ

シャア・アズナブル

CHAR AZNABLE



パイロット以上の存在

ジオン公国軍トップ・エースのひとりに数えられるシャア・アズナブルは、撃墜スコアだけを見るならば他のトップ・エースに劣っている。それでも彼の名が一年戦争において大きく取り上げられるのは何故か。それは、宇宙世紀における彼の存在が、単なるパイロットに留まらなかったためであろう。

宇宙世紀の歴史に興味を持つ者で、彼の本名を知らない者はいないだろう。キャスバル・レム・ダイクン——ジオン・ダイクンの長男として生まれた彼は、父の死がザビ家の陰謀によるものと教えられて育った。そうした教育によってザビ家への復讐心を育まれたキャスバルは、シャア・アズナブルと名を変えて公国軍士官学校へ入学。ジオン公国軍人への道を進んでいく。そして、一週間戦争とルウム戦役における活躍で一躍その名を高めたシャア・アズナブルは、ジオン公国軍内に

確固たる地位を築いていくこととなる。

シャアの人生が急速に流転を始めたのは、(WB)との接触がきっかけである。RX-78のパイロット、アムロ・レイとの戦いや、実の妹セイラ・マスの邂逅。彼らとの戦いの中でニュータイプの実験を受けたシャアは、次第にニュータイプによる時代の変革を望むようになっていった。彼にとつての戦いは、それを実現するための手段であったと見ることができよう。しかし、シャアにとつての不幸は、彼自身にそれを成し得るだけのニュータイプの素質がなかったことではなからうか。彼が残した言葉に「ニュータイプがニュータイプとして生まれ出る道を作りたかった」とある。この言葉は、彼が自指したものとその傍聴者の立場を明確に示しているといえるだろう。

“赤い彗星”の異名の由来

“赤い彗星”のシャア——地球連邦、ジオン公国の双方に広く知れ渡ったこの異名は、シャアが海軍として高連一撃脱戦法と、彼のパーソナルカラーからついた呼び名である。

ルウム戦役において宇宙攻撃軍に所属していたシャアは、赤く(厳密にはピンクに近い赤)塗装したMS-06Sに搭乗し、偽に「五艦飛び」と呼ばれる高連一撃脱戦法を用いて一度の攻撃で5隻もの艦艇を撃沈したと伝えられる。その戦法とは、最初に攻撃した艦艇を撃沈直後に離り、同時にスラスターを全面にすることで得た推力で次の艦艇へと接近。これを繰り返すことで、短時間に数多くの艦艇を撃沈するというものであった。艦艇、このような艦艇は一般のパイロットには到底無理な要当であり、シャアの卓越した操縦技術を示しているといえよう。彼が駆ったMS-06Sは通常の3倍のス

ピードを有していたという逸話が残されているが、実際に3倍の推力を有していたのではなく、そうした操縦技術と彼の戦果から伝播した地球連邦軍将兵の恐怖心が生み出したものだったのである。

シャアはいとも簡単にこの高連一撃脱戦法を行った。しかし実際には、敵艦の位置関係と予測到達点を正確に把握し、最短の軌道で接近しなければこの戦法を実現することは不可能だったといえるだろう。これを以て、彼が一年戦争初期からニュータイプとしての能力を発揮していたとする説も存在する(彼自身がそれを自覚していたかどうかは別として)。真実は定かではないが、こうした戦果によってシャアがエース・パイロットとしての地位を不動のものとしたことだけは確かな事実である。

ザビ家への復讐に隠されたシャアの目的

ザビ家に殺害された父ジオン・ダイクンの復讐——シャアがジオン公国軍に身を投じた理由がそれであった。幼年期にジン・パルから父の死がデギン・ザビの陰謀によるものと聞かされて育ったシャアにとって、父の仇を討つことはごく自然なことだったのかもしれない。

士官学校でザビ家の末子ガルマ・ザビと知り合い、単なる同期生以上の関係築いたのも、復讐劇への希求を計画した上でのことだったという見方が一般的である。そして、(WB)陣を退却して地球に降りた時、彼に復讐のチャンスが訪れることとなる。北米における(WB)陣との戦いに参加したシャアはガルマを翼にかけ、彼を護衛する。

しかし、シャアは後にキシリア・ザビとの密談の席で、このように

語ったといわれている——「復讐の後に何の高揚感もなく、ただ虚しい自分を見つけたとき、おかしくなったのです。自分に笑ったのです。この密談が政治的駆け引きの意味合いを含んでいた以上、この言葉にどれだけの信憑性があったのかは疑わしい。だが、彼はこのような言葉を残している——「父のこのようなニュータイプの時代の変革があるのなら、見てみたい。それが自分の野心です」。この言葉については、彼の他の言動などから考えても、本心であったと考えることができよう。

ザビ家を打倒することは、人の革新がすみやかに行われるための手段のひとつにすぎなかったと考えられる。いつしか、シャアにとつてのザビ家への復讐は、父の仇討ち以上の意味をもつ行為へと変質していったのであろう。



06 CHAR AZNABLE



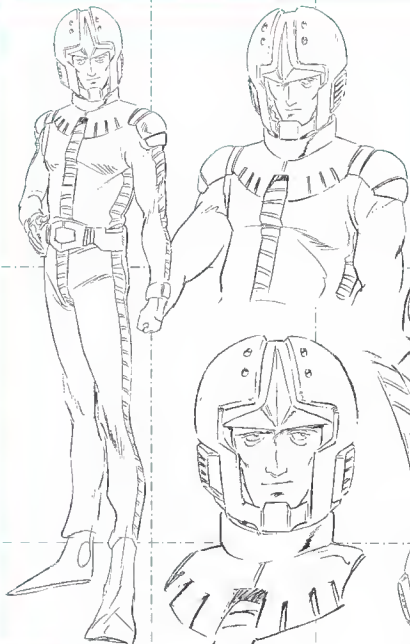
シャアとアムロ、ふたりのニュータイプ

シャアという人物を語る上で切り離せないことに、アムロ・レイとの関係が挙げられる。「再生のライバル」とも評されるふたりは、ジオン公国軍と地球連邦軍を代表するエース・パイロットとして、数々の戦場で熾烈な戦いを繰り広げた。サイド7脱出戦に始まりア・バオア・クー攻防戦に至るまで、ふたりの対決は枚挙に暇がない。しかし、パイロットとしての関係以上に、シャアとアムロの対決関係を明確にしたものが、ニュータイプとしての立脚点の差であったといえる。

シャアはニュータイプの時代の変革を望んだ。その眼前に立ちはだかったのが、アムロ・レイという一年戦争最高のニュータイプであった。シャア自身がニュータイプであったことはさまざまな記録から見て明らかである。しかし、彼が自らをニュータイプであると認識したのは一年戦争も終わりに近づいた頃であった。一方のアム

ロはニュータイプへの覚醒を着実に進め、ふたりの差は歴然たるものとなっていた。体制の変革を目指したシャアにとって、自らをはるかに超えるニュータイプであるアムロが地球連邦という体制の道具に甘んじていることは、許されざることであったのだろう。テキサス・コロニーでセイラ・マスと出会った際にシャアが語った「体制に取り込まれたニュータイプが私の敵となっているのは面白くない」という言葉は、そうしたアムロへのもたかしさを表しているといえるだろう。

ア・バオア・クー攻防戦の最終局面で、シャアとアムロは生身で対峙した。しかし結局、決着がつくことはなく、その遺恨は彼々まで残った。そしてそれは、地球連合全体を覆う戦乱の火種となったのである。



この「キマイラ」隊には、MS-14のバリエーションであるB型とC型が配備された。最新鋭機がいち早く配備されたことから見て、公国軍上層部がこの部隊にかけていた期待の大きさが想像できよう。なお、この部隊にはジョニー・ライデンのほかにもジェラルド・サカイ大尉、トーマス・クルツ中尉といったエース・パイロットが配備されている。

30



ジオン公国軍パイロット

Pilots of Principality of Zeon force

ア・バオア・クーに消えたジオン公国軍の栄光

ア・バオア・クー攻防戦では、参戦したジオン公国軍MS3600機のうち、未帰還機は3000機を越えたと言われている。それだけ多くのMSパイロットたちが、宇宙の塵となって散っていったということである。隆盛を極めたジオン公国軍もすでに斜陽を迎え、華々しい戦果を挙げたエース・パイロットたちは、この時点でその多くが墓を清めていた。しかし、未だ戦意を失わない歴戦のエースも依然として存在し、ア・バオア・クー攻防戦に参加している。「ソロモ

ンの悪夢」アナベル・ガトーや「真紅の稲妻」ジョニー・ライデンが、その代表的な例である。彼らはア・バオア・クー攻防戦でもその名に違わぬ活躍を示したが、戦局を逆転する要因にはなり得なかった。名もなきパイロットたちも、その多くがこの戦場で命を落とし、ア・バオア・クー陥落とともにジオン公国軍の歴史は幕を閉じた。戦歴の如きジオン公国軍エース・パイロットたちの物語も、ここに終わりを告げたのである。

「ソロモンの悪夢」——アナベル・ガトー

ドスル・ザビ中将麾下の宇宙攻撃軍に所属したアナベル・ガトー大尉（一年戦争時の最終階級）は、宇宙要塞ソロモンを拠点とする302戦隊中隊を指揮したエース・パイロットである。一年戦争後に地球連邦軍士官学校で使われた現代戦史の教本に記載されるほど、彼の名は有名であった。しかし、一年戦争における彼の総戦歴数は約80機程度といわれ、他のトップ・エースに比べるとかなり少ない部類に入る。それでも彼の名がこれほど知られているのは、ソロモン海戦での活躍に集るところが大きいといえる。

ソロモン海戦では、ドスル中将の戦死後、ジオン公国軍全軍に撤退命令が発せられた。ジオン公国軍の残存艦隊は戦力を分散されながらもア・バオア・クーへの撤退を固めたが、地球連邦軍艦隊はこれを追軍し、激しい掃討戦が展開された。ガトーはこのとき、ドロス級大型輸送空母「ドロフ」を中心とした撤退艦隊の隙を突き、追軍する地球連邦軍部隊に多大な被害を与えている。本来、掃討戦

は追軍側が優位に立つはずだが、このときのガトーの働きはそれを逆転させるほどであったのである。この戦果によって、彼は地球連邦軍将兵から「ソロモンの悪夢」の異名で呼ばれ、恐れられるようになった。

ア・バオア・クーに撤退を命じたガトーは、MS-14を乗機としてア・バオア・クー攻防戦に参加した。この戦いでも彼は高い戦果を挙げたが、敵の攻撃によって機体を破損し、エギーユ・デラーズの「グワデン」に着艦。そこでギレン・ザビ総帥戦死の報に接する。出軍を断ろうとしたデラーズに対して「生き恥を晒せど？」と言い放ったことなどからは、ガトーがア・バオア・クーを死地と定めていたことが推察できる。しかし、デラーズの脱走によって彼は陥落するア・バオア・クーから脱出し、戦後の混乱に乗じて潜伏していった。それから3年後、彼の名は再び歴史の表舞台に登場するのである。

「真紅の稲妻」——ジョニー・ライデン

ジョニー・ライデンは「真紅の稲妻」の異名をもつジオン公国軍トップ・エースのひとりであり、「黒い三連星」と並んで公国内で人気のある人物であった。しかし、その人気は軍部の情宣活動に絡むところが大きく、彼自身はその強い信頼に懐疑的な心持を抱いていたらしい。だが、彼のパイロットとしての実力が確かなものであったことは間違いない。ちなみに彼は、最大戦速で一軍離脱を行う戦法を得意としていたという。戦間時間の短いMS-06F-2を乗機としていた時期には、戦間中に推進剤の補給を行うケースもあったといわれている。

一年戦争初期からパイロットとして従軍し、ルウム戦役では3隻の艦隊を撃沈したと伝えられている。その頃から、彼の乗機は真紅に黒のアクセントが入ったMS-06Fとなった。そのため、彼はしばしばシャア・アズナブルと間違えられることも多かったという。な

お、彼はこの時期から一角獣をモチーフとしたパーソナル・エンブレムを用いるようになった。着実に戦果を挙げて、エースの名を不動のものとしていったジョニー・ライデンは、一年戦争末期にはエース部隊の「キマイラ」隊に転属されている。

ジョニー・ライデンは、ア・バオア・クー攻防戦に「キマイラ」隊を率いて参戦したと伝えられる。しかし、どのフィールドに配備されたのか、それだけの戦果を残したのかといった点については明確になっていない。戦後記録によると、彼のMS-14Bは撃墜することのないまま戦間が終了し、戦間中行方不明として処理されている。そして、彼の終身中佐への昇進が決定され、そのまま軍務を外されることとなった。ジオン公国軍の紅き一角獣は、一年戦争最後の戦役で静かに墓を清めていったのである。

地球連邦軍兵士の特徴

連邦軍人の特徴

地球連邦発足時に、各国の軍を統合する形で成立したのが地球連邦軍である。当初は、地球連邦そのものに対する不安や不満から各地で紛争が発生したため、それに対処するための地球連邦軍が必要であったことは間違いない。それでも、U.C.0050年頃までは地球連邦軍は縮小傾向にあったようで、治安が安定し、外敵も存在しないはずの地球連邦にとって、軍備の重要度は高くなかった。しかし、コロニー自治権要求運動が過熱すると、地球連邦軍は宇宙軍を創設、軍拡を開始した。

この辺りから、地球連邦軍は成立当初の志を忘れ始めたように見受けられる。シオン公国(共和国)という仮想敵国は存在したが、度重なる軍備の増強と大規模戦闘が発生しない状況は、実戦に投入しようもない“遊兵”を大量に生み出し、兵のモラルの低下を招く。また、軍備の拡充は既得権益の温床ともなり、軍全体に腐を生じさせかねない。一年戦争開戦以前の地球連邦軍が、このような状況にあったことは容易に想像できよう。実際、このような内部状況が地球連邦軍の増長を招き、一年戦争緒戦での敗北に繋がっていく。一年戦争開戦後も“ジオン憎し”の感情はあっても、戦争そのものに意義を感じられない兵士は多かったようで、地球連邦軍人の腐敗は各所で見られた(これに半年におよぶ戦線膠着が加わったことで、地球連邦兵の悪質化はさらに進んでしまったようである)。他に兵士たちの士気に悪影響を与えた要素として、士官学校を卒業していない軍人の昇級制限が挙げられる。士官学校さえ卒業していれば、大將への昇進の可能性もあるが、専門教育機関を出ていない軍人の昇進限度は大尉、特例として少佐であった。いくら戦果を上げてでも大尉止まりと分かっているうえ、戦争に意味を見出せないなら、戦意が失せるのも仕方がないかもしれない。結果、地球連邦兵の怠行は絶えず、ケリラ地帯では民間人からの略奪行為や、暴行事件まで引き起こしている。そこまで酷くなくても、代金の踏み倒しなど日常茶飯事だったようである。また、レクリエーションと称したケンカ騒ぎといったミニマムなもののから、病院船への攻撃など露見すれば国際法に抵触する上級軍人の卑劣な行為まで、様々な問題が山積していた。

それでも地元民との融和を図り、任務遂行に尽力した士官や兵も存在した。もっとも彼等がクローズ・アップされるのは、彼等が珍しい存在であることも意味しており、一抹の寂しさを覚えざるにはられない。





地球連邦軍の食事情

殺伐とした戦場で唯一と言っていい楽しみが、食事である。地上軍と宇宙軍では環境がまったく異なるため、当初は食事内容も大きく違っていた。宇宙軍では、重力環境を考えて粘性が高いレーション(ルナツで支給されていたタイプ)や、チューブ式の宇宙食が支給されていたが、その形状からか人気がなかったようで、一年戦争末期には作戦中の艦内であっても、ハンバーガーなどのポピュラーな食品も食べられるようになっていた。これに対して地上軍では、パンや肉類、サラダ、コーヒーなど比較的普通の食事が供給された。もっとも駐屯地に居ればの話で、作戦中は缶詰などのレーション類が多かったようである。

微妙に食事とは異なるが、煙草やガムといった嗜好品も支給されていた。前線の兵士には、1日につき煙草5本とガム4枚、後方の兵には煙草4本とガム3枚が支給されていたとの記録もある。アルコール類に関しては基地内に設置された酒場から、個人で購入していたようだ。

地球連邦軍の医療事情

普通に生活していても、怪我や病気は付き物である。砲弾やビームが飛び交う戦場においては言うまでもない。そのため、軍医や衛生兵がおり、将兵が負傷した場合、彼らの世話になることになる。宇宙世紀においても、基本的な医療処置は旧世紀から大きな変化はしておらず、骨折にはギブス、出血にはテーピングや輸血が施される。勿論、前線での治療には限界があるため、重傷・重体の患者は専門の医療施設まで後送される。それでも前線の医療レベルが低いという訳ではなく、輸血が必要な裂傷を負っても、一週間ほどで完治可能なようである。実際、<WB> 隊(ティアナム艦隊・第十三独立戦隊)所属のMSパイロット、ハヤト・コバヤシ曹長は、ソロモン攻略戦で輸血が必要な程の戦傷を負ったものの、一週間後のア・バオア・クー攻略戦に無理なく出撃し、MS戦だけでなく、生身での白兵戦にも参加している。

ジオン公国軍兵士の特徴



公国軍人の気質

ジオン公国軍は、U.C.0058年のサイド3独立宣言時に発足した「国防隊」(U.C.0062年、「国軍」へ昇格)を前身としている。そして、U.C.0069年の公国宣言によって、我々の知るジオン公国軍へと名称を変えた。そのジオン公国軍を構成する軍人は、士気が低いと評される地球連邦軍とは反対に、極めて高い士気で知られている。

ジオン公国軍の士気を支えていた要素は複数あるが、そのひとつに挙げられるのが「国家独立のために戦う」という明確な戦争目的が提示されていたことである。ザビ家、特にギレン・ザビの戦争目的が「国家独立」以外のファクターを含んでいたことはほぼ間違いないが、一般の将兵の大多数が(ギレンの演説や思想の影響を、多かれ少なかれ受けていたとはいえ)、心からの公国独立を願っていたことは確かであろう。

他の代表的な要素として知られるのが、ジオン公国軍の実力主義構造がある。士官学校卒業生以外の大規模昇進が不可能な地球連邦軍に対して、ジオン公国軍では戦功さえ上げれば、誰にでも昇進の道が開ける。2階級特進も珍しいことではなく、「赤い彗星」シャア・アズナブルも、ルウム戦役での華々しい戦功によって中尉から少佐への昇進を果たし、専用艦すら与えられる身分を得たのである。このような実力主義構造は、ジオン公国に広まっていた復古主義と融合することで、武人や戦士を自認するジオン公国軍人を生み出す背景となっていたと考えることもできる。

だが、このような風土は必ずしも利点ばかりを生み出した訳ではない。まず、戦果を焦った新兵が暴走する場面が見られたこと。そして、武人・戦士タイプの軍人が、自分の生き方や想いに拘泥した結果、自爆に近い愚行を遂げる例が散見されたことなどである。前者は、サイド7遭難戦でのジーン軍曹の例を見るまでもなく、部隊に著しい損害を与えるばかりか、本人も命を落すことが多く、人的・物的資源が限られているジオン公国にとって不利益となることは言うまでもない。後者の場合はさらに深刻で、武人タイプの軍人はベテランであることが多く、その損失は人的・物的なものだけでなく、他の将兵に与える心理的影響も大きい(ドズル・ザビ中將もこの分類に当てはまるだろう)。

ジオン公国軍人の中にも、マ・クベ大佐やキリング中佐のような冷静な軍人はいたが、こちらの方が例外的な存在だったのかもしれない。

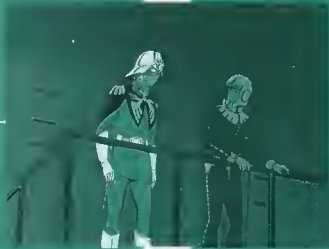
民間人のジオン公国軍に対する評価

ジオン公国軍人の態度は、紳士的と言われることがある。これは地球連邦時に地元民のゲリラ化防止や、悪徳情報確保のため、民間との融和を押し進めたことにある。地球方面軍司令のガルマ・ザビ大佐が、司令部を置いた北米のニューヨーク市で、市の重鎮たちを招いたパーティーを催していたことは広く知られている。他の地域でも、占領政策の一環として市民との融和策が進められたようで、これが“紳士的なジオン公国軍”のイメージが定着した理由の一端であろう(連邦軍人の暴挙によって、相対的にジオン公国軍人の評価が上がったという側面もあるかもしれない)。

これでジオン公国軍が受け入れられたかという、そうではない。東南アジアでは、戦略拠点として村を占拠したり、MSに乗った敗残兵が、無断で村に侵入したこともあり、どちらかと言うと非友好的な雰囲気漂っていた。また、一年戦争末期には、ソーラ・レイ建造のために一部国民を強制疎開させているため、サイド3での評価も微妙なようだ。

ジオン公国の徴用体制

地球連邦軍が志願制(後に徴兵制)であったのに対し、ジオン公国軍は最初から徴兵制を採用していた。これは国力だけでなく人口の面でも、地球連邦に大きく溝を空けられていた、ジオン公国の苦肉の策であった——と言うより、これ以外の選択肢は無かっただろう。ジオン公国は、短期決戦で地球連邦を下すつもりでいたのだから、徴兵制による社会基盤の弱体化は一時的なもので済むとの計算があったのかもしれない。しかし、予想を裏切って戦争が長期化し、消耗戦の様相を呈しはじめたことから、徴兵年齢の引き下げに踏み切る。戦争末期の徴兵対象年齢は、なんと15歳であった(本来の徴兵年齢は不明)。15歳での徴兵も異常であるが、さらに異常だったのは、彼らの一部をMSパイロットとして採用したことだった。彼らは最新MSゲルグを与えられた者も多かったが、付け焼刃のパイロット育成が効果を上げるはずもなく、戦場の塵と消えていった。



一年戦争におけるニュータイプの発現

ニュータイプとは戦争などをやらずにすむ人間たちのことであって、超能力者ではない。地球連邦軍のレビル將軍はニュータイプという存在をこのように評したといわれる。その一方で、ア・バオア・クー攻防戦の最中、アムロ・レイと対峙したシャア・アズナブルは「今という時では、人はニュータイプを殺し合いの道具にししか使えん」と断したと伝えられている。

レビル將軍の言葉は「ニュータイプとは認識力の拡大によって総体としてのコミュニケーション能力を得た者」という一般的なニュータイプの解釈の表れである。本来であれば、ジオン・ダイクンが提唱したニュータイプは、緩やかな時間を経て発現していくはずのものであった。しかし、一年戦争という状況が、ニュータイプの素養を持つ者たちの急速な覚醒を促していったと考えられる。それはあくまで限定的な能力の開花であり、ニュータイプ=パイロット適正の高い人間という未成熟な認識を生んだ。シャアの言葉はそうした実情を指したものであろう。シャアは「戦争がなければ、ララのニュータイプへの目覚めはなかった」と語ったという。それはある意味、真実であったのだろう。

しかし、ア・バオア・クー攻防戦において、アムロ・レイが「WB」隊のクルーを導いて脱出させたという事実は、ニュータイプの総体としてのコミュニケーション能力の発現と捉えることはできないだろうか。戦争という狂った状況の中でも、ニュータイプという人の革新が正しい方向性をもって進んでいった例であると、信じたいものである。

ララ・スンがアムロとシャアに遺したもの

ジオン公國軍のニュータイプ部隊と称される独立第300戦隊に配属されたララ・スン少尉は、「ソロモンの亡霊」と称されたパイロットである。しかし、彼女の存在が重要視されるのはパイロットとしてではなく、アムロ・レイとシャア・アズナブルに多大な影響を与えたニュータイプの女性としてであろう。

彼女はアムロ・レイとの交戦中、お互いのニュータイプ能力による共振現象の中でアムロの総体を理解したといわれている。一瞬にすぎない時間の中で、ふたりは思惟の交感を行った。この相互理解は、ララとアムロの突出したニュータイプ能力があって初めて起こり得た現象であろう。しかし、この戦闘でアムロは自らの手でララの機体を撃墜、死なせてしまう。ララとの間に人格の総体を理解しようというニュータイプの本質的な開花を体験した直後に、その終焉を自ら招いてしまったという事実。このことが、彼の心に深い傷を負わせたことは間違いないだろう。

一方のシャアは、後にララを評して「自らの母親になり得たかもしれない女性」と語ったとされる。一年戦争当時にシャアがララに対してそのような感情を抱いていたとは考えにくい。その言葉からは彼がララに掛けていた期待の大きさが窺える。

ララの死は、アムロとシャアのその後に重く押し掛かった。その顕著なニュータイプ能力によって、ふたりの掛け橋になり得たかもしれない女性は、その死によってふたりを縛る鎖となったのである。



ジオン公国軍学徒兵たちの悲劇

ア・バオア・クー攻防戦は、一年戦争における会戦の中でも特に被害が大きかった戦闘である。両軍を合わせて7000機以上のMSが破壊を果たすことなく、数多くの兵士たちの命が失われていった。中でも、さまざまな戦記でも悲劇として語られるのが、ジオン公国軍の学徒動員による少年兵たちの存在である。

一年戦争の長期化によってジオン公国軍の人的資源が枯渇し、慢性的な兵員不足に陥ったことは良く知られている。ジオン公国軍は徴兵制を敷いていたが、一年戦争末期にはこの年齢制限を15歳まで引き下げ、就学中の学生たちをも兵士として動員した。救国の名のもとに否応なく駆り出された彼らは、速成教育によって急場凌ぎの兵士として育てられ、各地の戦場に送り出された。その中でも有名なものは、MSパイロットとして養成された少年たちである。

彼らは最新鋭のMS-14を与えられ、ア・バオア・クー要塞の守備に就いた。彼らに与えられた徽章は「年少MSパイロット章」と呼ばれるもので、MS-14の頭部を側面からとらえたものであった（この徽章は俗に「ゲルググ初心者マーク」と揶揄された）。

ア・バオア・クー攻防戦において、彼らの多くはNフィールドの防戦にあたることとなった。学徒兵たちも搭乗したMS-14は、地球連邦軍のRX-78に匹敵する性能を有していたともいわれている。しかし、満足な実戦経験すら積んでいない学徒動員のパイロットたちにその性能を発揮する実力はなかった。ジオン公国軍首脳部が想定していた戦果を挙げられず、彼らの多くは地球連邦軍の猛攻の前に戦死していったと考えられている。

期待していた戦果を挙げられずにいるMS-14部隊の状況を前にして「養成は万全であった」と弁明したトワニング准将に対し、キシリア・サビ少将は「話は信じるが戦果だけが問題なのでな。跳過ぎるようだ」と洩らしたといわれている。彼女の指摘通り、学徒兵たちの働きの鈍さはア・バオア・クー陥落の一因となった。

ジオン公国軍において、兵士たちの士気の高さは地球連邦軍に対する優位性のひとつであった。学徒動員の少年兵についても、これは同様であったのだろう。トワニング准将はキシリア少将との会話の中で、学徒兵の救国の志を評価する発言を残している。しかし、ほとんどの場合、戦争の勝敗を決するのは戦力の差である。兵の士気はあくまで、その誤差を補完する要因でしかない。十分な訓練も行われないまま実戦に投入された学徒兵たちの運命は、半ば最初から決まっていたのだと考えざるを得ない。学徒兵たちの悲劇は、ジオン公国軍の落日を象徴するエピソードであったといえるだろう。

ゲルググが“ジオン製ガンダム”になれなかった理由

MS史における重要度で、**ザクⅡ**と並ぶ。比較されるジオン製MSは**ザクⅡ**である一方、スペック面では比較されること多いのが**MS-14ゲルググ**である。ゲルググのカラーリング・スペックはガンダムのそれと比較した場合、ほとんどの面で優れている上、量産機(量産機として設計されたのだから当然だが)、拡張性などの点でも勝っている。

では、何故ゲルググのMS史における立場がガンダムよりも低く見られるのか? どうしてガンダムと同等の名声を得られないのだろうか?

まず理由に上げられるのが、ゲルググが性能面でガンダムに勝っているのは「当り前」だからという点である。つまり、ほぼ同じ装備を施された、似通った設計思想の機体である以上、後発機のゲルググが、ガンダムより優れているのは当然なのだから(ダウングレードによる生産性の向上などの合理的な理由がない限り、後から登場した機体の方が優れていた方が問題である)。MS開発史は技術の歴史である以上、陸上戦機のようなタイ記録は有り得ない。先に完成した方が高い名声を得るのである。ゲルググのビーム・ライフルやビーム・ナギナタのことを画って、「前に出来たガンダムで立派な技術だ。今更、それを誇っても意味が薄い」と切り捨てられても文句は言えない。悪い例だが「ザクⅡ」と言われかねないのだ。このように考えると「遅れて来た名機」という評価も負け惜しみに関えてしまう。

ゲルググが量産機であることも不利には働きにくい。確かにガンダム級の性能を持つ量産機を開発、生産できたジオン公国の技術力は驚嘆すべきものである。MS史でクロス・アップされるのが

工業史的な側面ならば、量産機ゲルググの評価はもっと高くなってはいたはずだが、純粋技術に焦点が当たることが多いため、どうしてもガンダムのような高評価は得にくい。また、一年戦争後にゲルググと同等以上のMSが登場して来たのも、不運であった。

ゲルググの不運といえば、実戦配備が遅すぎたことも重要であろう。ゲルググ・シリーズを起った有名なパイロットと言えば、「赤い彗星」シャア・アズナブル大佐や「ソロモンの悪夢」アナベル・ガト(大尉(当時)、戦後にFe型を操ったシーマ・ガラハウ中佐などが知られている。これらのパイロットは、都を抜いた操縦技術を持ったエースであり、当時最高クラスの性能を誇るゲルググと、彼らのコンビネーションが絶大な戦闘能力を秘めていたのは間違いない。だが、前記の3機の中で、登場が最も遅かったと思われるシャア・アズナブル大佐のゲルググでも、実戦投入が確認されたのは12月24日のソロモン攻防戦直前であり、その活躍も限定的にならざるを得なかった(シャア・アズナブル大佐機は撃墜はゼロという説もある)。戦後のゲリラ作戦に参加したシーマ中佐機も、一年戦争終戦後の活動の大半は海賊行為であったと言われており、ゲルググの名声の向上に貢献しているとは言いがたい。伝説的活躍で知られるアム・ロ・レイ少尉のRX-78ガンダムの初陣は、9月16日。しかも、常に激戦区に投入されていたことを考えれば、名前に差が生まれるしかたないことではある。また、ア・バオア・クー戦でのゲルググのパイロットの大半が、学徒募集占められており、性能を十全に発揮できなかったのも痛かった。

ゲルググ系の設計を受け継いでいると、一目で理解できる後継機がほとんど開発されていないのも大きい。現在確認されている限り、ゲルググ系MSの最終型として知られているのは、第一次ネオ・ジオン戦争に投入されたMS-14Jリゲルグであるが、それ以外に確認されているゲルググ系MSは、一年戦争タイプのみと言っている状態だ。つまり、一年戦争後に新規に開発されたゲルググ系MSは、リゲルグだけということになってしまう。一年戦争後に開発されたMS、特にネオ・ジオン系MSにゲルググが与えた影響は大きかったと思われるが(AMX-011ザクⅢは、ザクⅡよりゲルググに近い設計思想を持つとの説もある)、ネオ・ジオン軍のMS開発系統がよく分かっておらず、ゲルググにとって不利な材料となってしまう。一方のガンダムは、ガンダム・タイプだけでなく、ジム系MSの始祖であることがハッキリしている。連邦系MSの大半はジム系機体であるため、外見上、ガンダムの系譜に属すると理解できるMSは多い。それに加え、一般人の目に触れることが多いMSもジム系系機体であるため、MSオファMSとしてのガンダムの名は忘れられることはない。

このように見て行くと、戦勝国の地球連邦＝ガンダムと、敗戦国のジオン公国＝ゲルググの差であることが分かってくる。戦勝国の方がメディアへの露出度が高いのは当然である以上(何しろ地球連邦は、地球圏規模の連合国家なのだ)、敗戦国の情報、特にハードウェアに関する情報が、一般市民の目に触れる機会が少なかったことは想像に困らない。また、ザクⅡの名前が余りにも大きいことが、ゲルググの影を薄くしていることも否めない。

Mobile Suit column 05

MS-14 GELGOOG

モビルスーツコラム MS-14 ゲルググ



ないだろう。これは旧世紀の式、洋装時代、大日本帝国海軍の零式艦上戦闘機の印象。大きかったため、後世、零戦以外の帝国軍機の名前が、一般の知る所とならなかったことを想起させる。一般の兵器に対する認知は、良くて戦争1回につき兵器数種、戦闘機や軍艦などの兵器カテゴリ毎に各1機種というが多いようで、この法則(?)は平成世紀でも適用できるかもしれない。

このように、ゲルググがジオン公国版ガンダムになり切れなかったのは、開発時期の問題よりも、ジオン公国が敗戦国であったことが要因であったという視点も成立し得る。敗者の情報は一部がクローズ・アップされ、他は一般の目から遠ざかりがちである。後者に含まれてしまったのが、ゲルググだったのかもしれない。



MS-14 ゲルググ

(ビーム・ライフル、ビーム・ナギナタ、
シールド、中隊長用ヘッド、ザクⅡ用サシカ工腕パーツ付属)

遅れてやって来た、ジオンの名機

一年戦争末期に投入された¹とで、ホテンシャリティを発揮する機会に恵まれず、今も²の過の名機として語り継がれているゲルググ。もし³の活躍をしていれば、ゲルググの存在感は⁴モビルスーツを圧倒し、その名を一年戦争史に深く刻⁵んだとする見方は依然と強い。アーマーを濃密させた⁶板で全身を包み込んだゲルググの姿は、グレーを⁷したボディカラーと相まって、ごつごつした岩の塊の機⁸こたずまいを見せる。外観デザインだけを見れば、スカ⁹に広がる腹部、下方に向かって膨らむ脚部などがド¹⁰の連続機といった印象を¹¹えよう。ところが、頭部のモノアイが全てを語る機¹²はザクの開発思想をストレートに¹³させたモビルスーツ¹⁴の¹⁵だ。兵器としての秘めた実力もさることながら、名機たる¹⁶を受け¹⁷ている点も¹⁸を引くモビルスーツといえよ



Figure "MS-14 GELGOOG" Manual

付属フィギュア解説 MS-14 ゲルググ

TOYBOOK COLLECTION SERIES

GUNDAM OPERATION

A・BAOA・QU

ア・バオア・クーレポートvol.5 兵士編

C O N T E N T S

ア・バオア・クー戦を支えた兵士達	2
軍服、ノーマルスーツ、兵装	4
ギレン・ザビの演説	10
一年戦争の兵士達	12
シオン公国軍、地球連邦軍、それぞれの思惑	14
ギレン・ザビ	16
キシリア・ザビ	18
ブライト・ノア	20
ア・バオア・クー戦のパイロット達	22
アムロ・レイ	24
地球連邦軍パイロット	26
シャア・アズナブル	28
ジオン公国軍パイロット	30
地球連邦軍兵士の特徴	32
ジオン公国軍兵士の特徴	34
学徒兵とニュータイプ	36
モビルスーツコラム MS-14 ゲルググ	38
付属フィギュア解説	40
次号予告	43

2004年4月25日発行 トイブックコレクションシリーズ ガンダムオペレーション ア・バオア・クーvol.0005

発行人 小松崎孝一 編集人 張僕謙次 企画・編集 株式会社セイカ トイブック事業部

発行・発売 株式会社セイカ 〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-8 栄泉岩本町ビル 電話:03-5820-3745(編集)

トイブックホームページアドレス <http://www.toybook.jp> 印刷所:協書印刷株式会社

トイ 製作管理 内山博之 ブック 執筆 坂口徳仁、杉山和繁 エディトリアルデザイン 有限会社ロケットパンチ イラスト 中村カンコ
アドバイザー 岡崎昭行 撮影 スタジオアール 中村浩 撮影協力 月刊ホビージャパン バックページデザイン 神田美智子(フレイナナビ)
編集協力 杉原克由、大矢直人(フレイナナビ) 監修 株式会社サンライズ

●本書は著作権上の保護を受けています。本書の一部、あるいは全部について株式会社セイカ トイブック事業部の承認を無しに、いかなる方法によっても無断で複写、複製することは禁じられています。●乱丁本、落丁本、梱包時における欠品及び破損は、小社品質管理室(03-5820-3743)までお送り下さい。送料弊社負担にてお取替いたします。©創造エージェンシー・サンライズ ISBN 4-902399-04-0 Printed in Japan. Made in China

NEXT ISSUE

次号予告

Vol.0006

GUNDAM OPERATION

A・BAOA・2nd

TOY

コレクションフィギュア6

MSN-02 ジオング

専用ジオラマベース

BOOK

ア・バオア・クーレポートvol.0006

終戦協定について、戦後のモビルスーツ

ア・バオア・クーデータベースetc

2004年5月25日発売予定

6巻にガンダムは付属しません

第1シリーズ続々展開中!! 6巻揃えれば「ラストシューティング」を表現可能!!



0001
大好評
発売中



0002
大好評
発売中



0003
大好評
発売中



0004
大好評
発売中



0005
大好評
発売中



0006
5.25
発売!

GUNDAM OPERATION

— A B A A G U I —

ア・バオア・クーレポート

0005^M

兵士編

